

メッセージを読む、

古典を読む

アナウンサー

加賀美幸子

『新編国語総合』国総314
の「メッセージ探しの旅」



『新編国語総合』に「メッセージ探しの旅」をお寄せいただいた、アナウンサーの加賀美幸子さんに、お話をうかがいました。

■ 「赤毛のアン」との出会い

——「メッセージ探しの旅」では、『赤毛のアン』から受けた衝撃について書かれています。

私が読んだのは『赤毛のアン』の日本初訳でした。ちようど読んだ時期がアンと同じ年齢なんです。一歳くらいから一五、六歳まででしょう。両親が早

く死んでしまったって、孤児になって、あちこちたらい回しにされて。でも、その中でちっともめげない。そんな様子を夢中になって読みました。

自分自身をどう励まし、力づけるか。そのことが大事で、人からほめられなくても、自分で自分自身をほめる。普通、ほめられることなんてめったにないのですから。自分を叱咤激励する言葉があれば、たいがい間違えないと思うのです。そういうメッセージを受け取りました。

アンは本当にすてき。赤毛であまり美しくないので、自分は美人だと、自分で言い聞かせているんですよ（笑）。

アンが成績もいいのは、やはり言葉の力ですね。言葉を豊かに持っていれば考える力の元があるということですから。

——アンが朗読するシーンにどきどきしたとお書きになっています。

本当にその場面のイメージが浮かんできたのです。彼女がそこに座ったり、立ったりして、何人かに囲まれていて、部屋にはこんな窓があって、と映像的に見えてくる。アンの朗読の内容は、自分自身を励ます朗読であり、人々に伝わる朗読です。自分と人々との間の空気をつくっていく力です。よけいな説明

をしなくても、ものを読むことによって、自分自身を伝えることができるものなんだなと思いました。

——それが加賀美さんの今につながっているわけですね。

あの年頃に魅力を感じたことというのは、しっかり身につくんですよ。だから、その頃何を読むか、何に接するかによって、ずいぶん違う。同じものに接してもまったく関係ない人もいるし。不思議ですよね。「メッセージ探しの旅」にも書きましたが、エッセイストの熊井明子さんは同じアンを読んでポプリに魅せられたのですが、私は、全く、ポプリがどこに書かれていたのかもわからない（笑）。

■ 古典の面白さを広めたい

——加賀美さんは古典の朗読をとても大事になさっています。古典についてお話をうかがえますか。

たとえば、『百人一首』は小学生の教科書にも載っていますね。まずは意味が十分にわからなくてもいいから、日本語の豊かな響きを味わうことが大事です。恋の歌も多いのですが、恋といっても赤裸々な表現ではなく、作者の生き方と思いがあふれます。古典は説明的に書かれていないので想像できるところがいいですね。

『枕草子』も、「春はあけぼの。」と切り切る。びたつと決めて、その文章の息遣いで、あけぼのがいいのか、そうではないのか、読む人が考えるわけです。『枕草子』の面白さって、そういうやり取りができることだと思います。それに、日本の古典はどこから読んでもいいので、読みやすいし、近づきやすい。

——放送でも多くの原文朗読をなさっていますが、『平家物語』も取り上げていますね。

『平家物語』は合戦の物語とも言われます。しかし、相手と戦う……ということより、「死」ということに、どう向き合うか、それは、自らの生き方にかかわってきます。相手を殺して万歳なんていう人はいないはずですよ。苦しくて、仕方なく倒すのです。それは自分との闘いです。

憎悪ながら教室で一言、そういうことを先生から伝えていただければ、『平家物語』が違って見えると思います。

古典は、文法や語句の解釈を超えて、「生きるメッセージ探し」だと私は思いながら読んでいます。『枕草子』も『源氏物語』も千年も生きてきたのですから。生き方のメッセージがあふれにあふれていて惹きつけられます。





「メッセージ探しの旅」の朗読収録の様子。あの温もりのある、おなじみの声による朗読は『新編国語総合』朗読CDに収録されています。

——それがまた、現代の感覚に通じるところが不思議ですね。

通じるどころかまったくイコールです。変わらないというか、同じ。だって、人間に古い新しいなんてないのですから。文法や言葉の意味だけではなくて、生き方のメッセージを読み取ってみんなで話し合ったり、先生方が古典の面白さを語ったりしてくださったら、子供たちはもっと古典を好きになることでしょう。そこから生き方の鍵を得ることもできるし、日本語の豊かさ、深さとか、厚みとか、広さが伝わり、心動かされると思うのです。

古典の現代語訳もいろいろあって、『源氏物語』でいえば、瀬戸内寂聴さんも、林望さんも、円地文子さんも、谷崎潤一郎や与謝野晶子も、それぞれ素晴らしい。

でも、原文を読んで、紫式部や清少納言の息づかいに直接耳を傾けてほしい。原文の素晴らしさは、また違います。昔は、紙も乏しかったので、みんな耳で聞いたはず。だからもともとわかりやすく書かれているのだと思います。

古典を読んでいると、漢詩がしばしば出てきます。日本人がいかにか漢詩漢文を読み学んできたか。「漢詩を読む」という番組も担当していますので改めて感じます。そのことを思うと、中国との関係など、

もつとよくなると思うことしきりです。

古典は宝だと言っても、読まなければ宝になりません。教科書を古典の入り口にして、いかに古典が楽しくて、生きるメッセージにあふれているかに、気づいてほしいです。

■メッセージ探しと読書

——東日本大震災のとき、東北にいらつしたそうでしたね。

三・一一のとき、朝、東京をたつてお昼に仙台に着いて、NHKのドキュメンタリー番組の収録をしていました。その最中に震災が起きたのです。机の下にもぐって、死ぬ覚悟をしました。こうやって人は死ぬのかなと思つたものです。なんとか助かったのですが。

古典を読むと、地震や災害の話がたくさん出てきますね。『方丈記』もまさにそうです。その中で人々はどうであったか、どう乗り越えてきたか……。何にもメッセージがあります。死や、悲しいことはいっぱいあっても、そこからどうすればいいのかとか、どうしてこの人はそうなったのかとか、必ずメッセージを受け取ることができると。

勉強は、勉強のための勉強じゃなくて、自分が生

■考えるための言葉、自分を励ます言葉

——『赤毛のアン』との出会い、さまざまな古典との出会い、そして、アナウンサーというお仕事や朗読を通じて、言葉とかわつてこられました。

言葉には、伝える言葉、考える言葉、そして、自分を励ます言葉の三つがあると思います。私たちはつい、伝える言葉とだけを考えているし、伝え方とか方法論ばかりに目がいつてしまいがちです。でも、言葉を構築することで概念をつくっていくわけですから、言葉は考える道具でもあります。考えを深めるためにも、言葉は豊かでありたいと思います。そして、自分自身を励まし、叱咤激励する言葉を持っているかどうか、自分に向かって話す言葉があるかどうかで、たぶん、人生は変わってくると思うんです。

古典を読み、さまざまな本との出会いを通して、多くのメッセージを受け取り、自分の心の言葉を豊かにしていつてほしいと思います。

——ありがとうございます。

二〇一三年一月二六日 都内のスタジオにて



加賀美幸子(かがみ さちこ) 一九四〇(昭和一五)ー。アナウンサー。東京都生まれ。主な著書「『生き方の鍵を見つけよう』」「ことばの心に耳をすませば」など。「メッセージ探しの旅」は、『ところを動かす言葉』所収のエッセイをもとに、教科書のために書き改めたもの。

きるための勉強だと思えばいいと思います。つまらなかつたらつまらないでいい。何がつまらないのか、つまらない原因は何かを考えることからだつて、メッセージを受け取れます。古典を読んでいると、なんでこんなにつまらないことを大事に書いてあるのだらう、ということがよくあります。でも、その理由を考えていると、また面白くなってくる。

——そういうふう感じられるきっかけ、いい先生との出会いみたいなものが必要なんでしょうか。

機会はあるんじゃないですよ。きっかけもないし、出会いもないかもしれない。自分で探すしかない。さつきお伝えした自分に向かって叱咤激励する言葉もそうです。自分で見つけるものです。

——内に向かつて言葉を探すんですね。

結局、そのために本を読むことが必要ですね。私たちはみんなそうでしたよ。周りに何もなくて、頼れる人もいなくなつたから、仕方がなくて本を読む。それがみんなプラスになつていったわけです。

一冊全部を読めなくてもいいんです。ワンメッセージだけでいい。それ以上は忘れちゃうから。ワンメッセージだけでも生き方の鍵が見つけられれば、読んだ意味があるのでは。



「生命情報・社会情報・機械情報」

21世紀情報社会では「機械情報」が氾濫し、コミュニティ全体への身体的共感が失せていく。新しい観点から情報社会のありかたを見直す必要性を説く。〔現代文 上巻〕

血の通う情報社会とは

「僕の書く小説は単なる情報ではない。ガイドブックなんかと一緒にして、コンビニで安売りするのはやめてほしいのだ」——いつだったか、高名な作家が新聞にそう書いていた。

まったくその通りだと、作家のファンは快哉を叫んだかもしれない。たしかに、心血をそそいだ文章が、催し物案内などと同列に扱われたら悲しいだろう。

とはいえ、「単なる情報」という言葉がどうもひっかかる。あの作家は、情報とはいったい何だと思っているのだろうか。

今や、現代小説をコンビニで売るところか、古典作品をインターネットからダウンロードし、電子書籍で読める時代である。電子教科書の計画も進んでいるようだ。コンピュータから見れば、どんな名文も0と1のデジタル情報以外ではない。事実、作家の小説も、印刷され出版されるまでにコンピュータで処理されて

いる。情報社会とはそういうものではないか。

……と言って、機械音痴の作家の無知を嗤うのはたやすい。だが私には、作家が感じている切実な危機感を無視してはならないとも思えるのだ。

世間の常識では、「情報」とは、効率よく機械的に処理できる数字やデータのようなものである。そこには、血の通った身体に支えられた喜怒哀楽も、張り裂けるような情念も入りこみ余地はない。とすれば、もし小説を0と1の情報に無理に還元するならば、いったい何が失われるだろうか。作家はその喪失を恐れているのだ。いわゆる情報社会の最大の暗部がここにある。

あえて暗部の淵源をたずねれば、二〇世紀半ばに誕生した「サイバネティクス」まで行きつくだらう。これは生命体や機械といった対象を同列にあつかい、変動する外部環境のなかでそれらが安定的に作動する条件を分析する学問分野である。情報、メッセージ、コ



にしがき 西垣 通

情報学者。東京経済大学コミュニケーション学部教授。主な著書に『デジタルナリス』『ウェブ社会をどう生きるか』『ネットとリアルのおいだ』など。

ミュニケーションなどといった情報社会の基礎概念が、そこから生まれてきたのである。

この古典的なサイバネティクスのもとでは、人間と機械とのあいだに明確な線を引くことは難しい。極論すれば、小説を書く人間も読む人間も、ともに情報処理機械のように見えてしまうのだ。

馬鹿なことを言うなど、作家は憤るだろう。だが、反論するためには、新たに情報という概念を問い直し、サイバネティクスを再構成する必要がある。機械と情報ではなく、生命体と情報との本質的な関係を、必死で洞察していかなくてはならない。

あまり知られていないが、実はそういう努力は二〇世紀末から少しずつなされてきた。これは「ネオ・サイバネティクス」という名前で呼ばれている。

従来の古典的サイバネティクスとネオ・サイバネティクスの違いは、前者が対象を外側からいわば客観的に眺めるのに対し、後者は内側から、対象の主観を尊重してとらえようとする点にある。たとえば、猫の目に光を当てたとき、猫の脳がどう反応するかを調べるとしよう。古典的サイバネティクスでは、光の波長を入力、脳波を出力として、両者の関係を分析する。一般的な客観的なデータを得ることが実験の目的だ。一

方、ネオ・サイバネティクスでは、「その猫」特有の体験にもとづく主観的な反応がいかに形成されたかを記述しようとする。

つまり、ネオ・サイバネティクスとは、人間のような生命体を、体験にもとづく主観世界をもつ自律的な存在ととらえる知なのである。そして、そこに他律的な機械との根本的な相違を認めようとするのだ。

考えてみれば当たり前の話だろう。われわれは皆、それぞれ主観的な世界に住んでいる。自分固有の世界から完全に脱出することなど決してできない。インターネットから同じ情報を検索しても、個人によつてそれぞれ受けとり方は違うのだ。

それなのに、今の情報社会では、同じ入力情報を人間に与えればまるで機械のように同じ出力行動をするかのような、粗っぽい仮定が暗になされている。いや、正確に言うると、同じ出力行動をすることが情報社会では最適だと、漠然と信じこまれているのである。

このとき、いかに商品が溢れていても、情報社会はどこか熱い血が通わない、魅力のないものとなってしまう。そこに作家の危機感がある。

だからいま求められているのは、情報をロボットの手から人間の手に取り戻すことではないだろうか。



[生物多様性の恩恵]

水をはじく葉の表面構造をまねた傘、オナミミからヒントを得た面ファスナーなど、生物多様性からヒトが受けている恩恵について論じ、その大切さを説く。(『現代文 下巻』)

ヒトを育んだモザイク環境



わたべ いづみ
生態学・保全生態学者。東京大学大学院農学生命科学研究科教授。主な著書に「につぼん自然再生紀行」「さとやま―生物多様性と生態系模倣―(生物多様性入門)」など。

現生人類がどのような道筋をたどって進化してきたのか、今日ではDNAの分析から多くを推測できる。人類が遺伝的に近縁なチンパンジーやボノボと袂を分かったのはおよそ二〇〇万年前、そのなかから進化したホモ属のうち和名ヒト、学名ホモ・サピエンスの現生人類が東アフリカで暮らし始めたのは二〇万年ほど前と推測されている。一二万年ほど前にヒトは新天地を求めて移住をはじめ、いくつもの経路を経てやがて地球上にあまねく分布することになった。

農業がはじまる一万年ほど前まで、ヒトは食べ物も暮らしに必要なものも、ほぼすべてを採集・漁労・狩猟、すなわち広義の採集によって得ていた。農業開始後も、採集は重要な営みとして継続され、農地と共に生物資源の採集地である多様な樹林、草原、湿地がモザイクをなす環境で暮らした。それに対して、食品を含む多くを工業製品に依存する現代の暮らしの歴史

は、二〇〇年程度に過ぎない。

生物の環境への適応進化には、何世代もの世代時間が必要である。ヒトが成人して子どもをつくるまでの約二〇年を一代として「ものさし」にすれば、適応進化に十分な時間なのかどうかを判断できる。ヒトが出現する前から人類が続けてきた採集は、何万世代、あるいは何十万世代も続いているので、私たちの心も体もそれに対して十分に適応しているはずである。ドングリや貝を拾うことが子どもたちの楽しい遊びであり、魚釣りや「くだもの狩り」が子どもも大人も楽しめるレクリエーションであるのはそれゆえだろう。

農業開始から現在までのヒトの世代数は四〇〇世代程度である。早くから牛を飼って乳を飲む暮らしを始めた人々は乳糖を分解する酵素をもっているのに、ごく最近になってから牛乳を飲みはじめた日本人の中にはこの酵素をもたない人が多いことなどから、栄養摂取したのはサバンナであり、疎林、草原、河畔林、湿地などがつくるモザイク環境であった。変化に富んだモザイク環境において、多様な生物を採集して餌とする雑食の性質を強めたのがホモ属である。現生人類は、その特性ゆえに、幾多の環境変動を乗り越え、今日まで生き残ることができたといえそう。

近代技術と工業にもとづく生活の継続は、一〇世代程度でしかない。私たちが、生物としては現代の生活に適応していないのは当然である。ヒトには、生物としての適応に加え、ヒト特有の文化的な適応、すなわち言語と教育による経験の共有や科学技術などによる適応の可能性がある。しかし、技術や社会の変化のスピードがあまりに速すぎて文化的な適応も追いついていないようだ。原子力災害は、見方を変えれば、その顕著な例の一つともいえるだろう。ヒトが自ら作りだした環境に生物的にも文化的にも適応できないという、不適応現象は、今後ますます深刻化する可能性がある。問題の解決には、概して採集生活に適応したままの私たちの心が本来どのような環境を求めているのかをしっかりと認識することが必要だろう。

人類のふるさと東アフリカで私たちにつながるホモ属のヒトが誕生した頃の生息環境は、ホモ属の祖先の人類や霊長類が暮らしてきた熱帯雨林の中でも、乾燥地帯の草原でもなかったようだ。初期のヒトが暮らし

たのは重要な要素である湿地では、貝や魚などのタンパク質を多く含む多様な餌がとれる。そのことは次の二つの理由で、脳の発達を促しただろう。第一に、タンパク質の豊富な餌をとることで、脳の発達のための栄養的条件が満たされた。第二に、変化に富んだモザイク環境を縦横に利用した多様な資源を採集する暮らしでは、感覚器官は絶えず複雑な刺激を受けると同時に、空間の認知と記憶の発達を促す強い選択圧が作用する。環境のモザイク性がヒトの特別の知的能力を適応進化させたといつてよいだろう。

環境モザイク性は、多様な樹林あり草原あり水辺もある「さとやま」の特徴でもある。モザイク環境への適応進化がヒトの知的能力を発達させたのだとしたら、さとやまで五感を研ぎ澄ましながら遊んだり、学んだりすることは、子どもたちの成長過程においても重要な意味をもつといえそう。



「家族化するペット」

ペットの家族化という現象の背後にあるものとは。近代化の過程における共同体の変質と家族の変容を身近なテーマから論じた評論。
 (「精選現代文」「新編現代文」)

「ペットの家族化」をめぐる



やまだ まさひろ
山田昌弘

社会学者。中央大学文学部教授。主な著書に「パラサイト・シングル」の時代、「希望格差社会」「家族・ペット」など。

私が専門とする社会学という学問は、高校生にはなじみが薄いかも知れません。現代社会に生じている新しい現象を記述し、原因を突き止め、将来を予測するというのが、社会学の一つの課題です。私は、社会学の中でも家族や結婚問題を研究しています。その中で、私は、学卒後も親と同居し続けリッチな生活をしている未婚者が、まるで親に寄生しているように見えたので、彼(女)らを「パラサイトシングル(寄生独身者)」と名づけました。そして、結婚を目的としてさまざまな活動を行う人を見て、それを就職活動にならって「婚活」と名づけ、その現状と原因、将来について考察を進めてきました。

パラサイトシングルや婚活は、高校生にとっては、将来はともかく、切実な問題とは感じられないでしょう。しかし、教科書に取り上げてもらった「家族化するペット」は、高校生にも身近なものと感じられるはず

切なもので失われる機会が最も多いのが、「家族としてのペット」なのです。

ペットを人間の家族のように大切にすることに對しては、実は、意見の対立があります。ペットに高価な食事をさせる、ペットが病気ににかかったら医者に連れていって治療費を負担する、ペットが死んだらお葬式をしてお墓を作る。私がこのような例を紹介すると「世界では餓死する子どもがたくさんいるのに」、「病気で医者にかかれないう低収入の人が日本でも増えているのに」、「引き取り手のない孤独死が年三万人にもものぼるのに」などの理由をあげて、「ペットにお金をかけるくらいなら、貧しい人間を助けることに使うべきだ」という意見が必ず出てきます。

意識調査をすると、ペットを家族と見なすことに對する賛否は拮抗します。近年は、賛成の人が増えていますが、学生アンケートでも、「よくないことだ」と書いてくる人もいます。高校生や先生方の中でも、無関心の人もいれば、眉をひそめる人もいるでしょう。だからこそ、私の「家族化するペット」という文章が、教科書に採用されたことは、意義があることだと思っています。

研究を続ける中で、これは行き過ぎではないかと思

ずです。私は、感情体験を社会的に研究する「感情社会学」も専門にしています。人がどのような時に、どのような感情を抱くかという点について、社会的に分析するのです。そして、よく大学生に対して、「一番幸せを感じた時」とか「男性(女性)であつてよかったと思つた時」などのアンケートをします。

その中で、「今までの人生の中で、もっとも悲しかった時」という質問の回答で、いつも一番の支持を集めるのは、「ペットが死んだ時」でした。私としては、「異性に振られた時」などの回答を期待するのですが、今は、「恋愛不況」の時代、高校生の恋人保有率は低下傾向にあり、異性への関心も低下しています。また、核家族化が進んでいる上に、今の日本人は長寿です。親はもちろん、祖父母が亡くなる経験も先送りされています。悲しいという感情は、大切なものが失われた時に感じる感情です。今の学生の短い人生の中で、大

う例にたくさん出会いました。ペットの検診用に改造されたCT、ペット専用のお経をあげるお坊さん、ペットのためにエアコンをつけっぱなしにするなど、そこまでしなくてもと思うものもあります。しかし、現実にはペットとかわることで、「自分が必要であり、大切であるという実感」を得られている人がたくさんいます。

かくいう私も、「幸せを感じる時はいつですか」という質問に對して、「ペットのネコをなでている時」などと答えています。私がベッドで寝ていると、ネコが寄ってきて、マッサージをねだります。体をなでていると、ネコはすごくきもちよさそうな表情を浮かべます。ネコを幸せにできる自分があるんだという感慨と幸福感にしばらく浸ることができます。

ペットの家族化という問題は、「人が幸せを感じていることに対して、それが他人の犠牲の上に立っているからやめろと言う権利があるのかどうか」という問題につながっているのです。私の文章が、高校生にいろいろな社会問題を考えるきっかけを提供できれば、社会学者としてこれほどの幸せはないと思つています。

読んできた本、 読んでほしい本

③

さわだ えいすけ
澤田 英輔

筑波大学附属駒場中・高等学校



荻谷夏子 著

『評伝 大村はま』（小学館、二〇一〇）

本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介します。

■偉大な教師が自ら招いた孤独

私は、この人にまず圧倒され、次に憧れ、最後に憎むようになるだろう。

もし大村はまが同僚だったら、自分はずっとそうしていたと思う。それほどまでに、彼女の存在は傑出しすぎている。

著者の荻谷夏子は、はまの教え子であり、晩年の世話を手伝つてもいた人物。この『評伝 大村はま』は、その愛弟子が、恩師の生涯を丁寧に追った評伝の傑作である。もちろん、「授業の鬼」と呼ばれたはまの授業にも多く触れており、現役の教員にはその点でも読み応えがある。特に、彼女が生涯をかけた作文指導のさまざまな工夫は圧巻だ。

実は私も作文指導に関心を持ち、その中

ではまの著作に触れた。この評伝も『大村はま国語教室』（全15巻別巻1、筑摩書房）の記録を参照しながら読んだのだが、その内容に圧倒されて笑ってしまうことも少な

くなかった。自分が考える程度の実践のアイデアも、解決すべき課題も、とっくの昔に、彼女が全部、自分には到底できない質の高さで取り組んでいる。その事實は、国語科教員となって数年たち、自分の中で生まれつつあった安心感を、あっけなく打ち砕いたと思う。

高い力量と、寸暇を惜しまない努力によって、「日本一の国語の先生」になった大村はま。睡眠も削り、結婚もせず、老母をもほとんど置き去りにして仕事に向かう彼女。なまじっか意欲と能力のある教員が中途半端に自分の実践を真似ることも許さぬ

ほどの、まっすぐなひたむきさ。

おそらく、「出る杭を打つ」とか「ねたむ」というレベルではなく、そんな大村の存在自体が、多くの同僚の自己を脅かすものだったのだと思う。彼女は行く先々の職場で疎まれ、居場所を転々とするしかなかった。はまが自ら招いたその孤独を、著者は、恩師への敬意と、周囲の人々への理解とともに、温かなまなざしで描いている。

大村はまの実践は、今も語り継がれ、部分的にはあれ、熱意ある人々によって引き継がれている。彼女自身は「例外」にとどまるしかない巨大な個性だが、教え子が書いたこの評伝の質の高さが、その個性が生んだ教育の普遍性の証とも言える。いつ読み返しても、痛みとともに、それだけではない何か、自分の中に残る一冊だ。

特集

時代を 〈読む〉力

〈読む〉力が必要とされている。

テキストを読む。資料を読む。

流れを読む。気持ちを読む。

評論を読む。文学を読む。古典を読む…。

読むことはすべての発信の出発点。

読むことは思索と想像、そして創造の原点。

本特集では、大修館の教科書教材を素材としな

がら、〈読む〉の現在を見つめ直します。

教科書から「現代」を読む

初谷和行

大修館「現代文」の新教材を読む

三宅義藏／門倉正二／石塚修／高根沢紀子／新見公康

今こそ古典を読む

奥村準子／高野由紀夫

教科書から「現代」を読む

はつがい かずゆき
初谷和行

貞静学園短期大学保育学科講師

教科書キーワードに見る〈現代〉

★『現代文 上巻・下巻』(現B308・309)

●『精選現代文』(現B310)

○『新編現代文』(現B311)

◆国総311・313

教科書に収録されたさまざまな文章。そのテーマや筆者をキーワードごとに分類・整理してみることで、「現代」の様相が見えてこないだろうか。

左のマップは、大修館の「現代文B」および「国語総合」教科書の評論や随想教材を素材にし、「現代」を考えるためのキーワードを立てて、それぞれのテーマとの関連性を考慮しながら教材を配置したものである。あくまでも筆者の主観的な判断による整理にすぎないが、そこから確実に「現代」の手触りをつかむことができるように感じる。

以下、教材の内容をふまえながら、マップから読み取れることなどについて、いくつかの視点から考察する。

■情報化社会に生きる人間の行方
情報化社会が急速に進む中で、人間の身体性のあり方が問われている。西垣通の「生命情報・社会情報・機械情報」では、題名にある三つの



情報の分類を通じて、情報化社会の課題が論じられている。現代は機械情報が氾濫しているが、西垣は、そのような情報を得るだけでは「私(自己)のリアル」が作られた状態で生きることはつながらないという。生身の人間同士の直接のやりとりは避けるが、ネットワーク上でのやりとりは活発というような傾向は、現代の高校生によく見られる。西垣は、このような状況に対して、真に生きるためのコミュニケーションへの身体的共感が現代の情報化社会の課題であるとする。

情報化時代における「生」や「学び」のあり方という点では、石田衣良「『迷う』力のすばらしさ」や藤原智美「『検索』時代における『読書』も興味深い。両者とも、情報化社会において人々が「答え」をすぐに求める傾向を指摘している。

たしかに、すぐに「先生、答えは？」と聞いてきたり、じっくり調べ物をする顔を面倒がったりする

生徒は多い。そのような傾向に対して石田は、幼い頃に本屋や図書館で「うれしく迷う」た経験を紹介しつつ、「たつぷりと迷えること」こそが人生の豊かさにつながると指摘する。一方で藤原は、答えの出発点である問題意識は与えられるものではなく生み出されるものであると指摘し、その上で読書による創造的思考について述べている。

情報化は今後ますます進展するだろう。そのとき、情報と我々の身体やコミュニケーションはどのように関わらなければならないのか、情報化社会の中で生の充実をどのように図るのか、創造的思考をどのように生み出すのか。生徒たちと考えを深めたいテーマである。

■分節化により立ち現れるものとは 私たちは他の動物と比較して高度な思考が可能な生き物であり、それを司るのが「言語・言葉」である。「言葉」について論じた文章とし

矢は、「後悔」とは「ああすればよかった」などと反事実的な想像をすることであるとし、それを可能にするものとして、ウイトゲンシュタインの「論理空間」という概念を位置づける。その上で人間は論理空間を「分節化」により了解するとし、「分節化された言葉」を持つことで、それが可能になっているというのである。

このような言語・言葉に関する認識については、多くの生徒はこれま



「猫は後悔するか」野矢茂樹

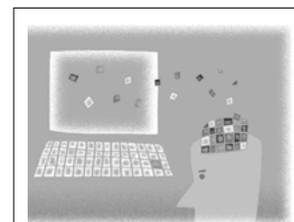
(『現代文 下巻』現B309・『精選現代文』現B310)

標識や鉄道路線図も言語であるとは、どういうことだろうか。「分節化」という概念をウイトに富んだ文章で説明し、言語の働きの本質を探究する。

で考えたことのない内容であろうが、ぜひ読ませたい評論である。これらの射程は、言語論にとどまるものではなく、より広く、「認識・認知」に関わる領域へとつながり得るものだからである。「分節」や「認識」という概念によって考察された他の文章の理解も深まり、世界観を広げることにつながるはずである。

例えば、「遠」と「近」の双対的な分節による風景の立ち現れについて論じた中村良夫「風景はどのようになり現れるか」は、分節化を風景論へと展開したものである。また、定番教材である「ミロのヴァイナス」を「論理空間」の無限性と「美」を結びつけた評論として読むこともできよう。

■近代的システムと日本的システム 14・15頁のマップの中央部には、キーワード「社会システム」が置かれ、それが「近代」へとゆるやかにつながる。「近代」と現代における



「『迷う』力のすばらしさ」石田衣良

(『新編現代文』現B311)

ネットで検索すれば簡単に「答え」が得られてしまう現代。「迷う」ことの意味を見つめ直そうと説く巻頭随想。

て、鈴木孝夫「人を指す言葉——自称詞・対称詞・他称詞」がある。西欧の言葉と異なり、日本人は自称や対称、他称の際に、社会的な枠組みの中で相互の位置関係を表すような言葉（「お巡りさん」「先生」「社長」など）を用いているという。さらに、そのような言葉の選択は日本人の性質とも関連するという。

このような言語の性質は、対象や世界をどのように分けるかという問題に行き着く。言葉は「分ける」機能をもつのである。

野矢茂樹は「猫は後悔するか」でそのことを端的に解説している。野

「システム」は、どのように関係づけられるだろうか。

丸山真男は「『である』ことと『する』こと」で、近代社会の社会規範は「する」ことであり、それ以前の社会のそれは「である」ことであると述べた上で、急速な近代化のもと、日本では「である」行動様式と「する」行動様式が「ゴツタ返し」の状況であるという。

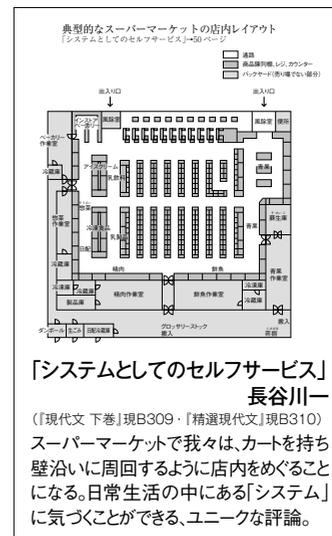
この丸山の議論をふまえて、「である」の論理について、高階秀爾「居住空間における日本的なもの」を通して考えてみるのも面白い。高階は、日本の建物は西欧の建物とは異なり、「うち」という考え方により心理的に内部と外部を区切るという。さらに、「うち」は関係性の中で使い分けられる概念で、「間」という言葉で表現されるとする。伝統的な日本の「である」文化の例として読むことができるのではないかと。

一方、近代以降の「する」価値は、効用と能率を重視した社会を進展さ

せ、大量消費社会をおしすすめた。すでに明治時代に北村透谷が「漫罵」で嘆いていた物質社会、消費社会は、現代においてシステムと化した。

そのような社会システムについて具体的に述べた文章として、長谷川一「システムとしてのセルフサービス」があげられる。長谷川は、スーパーマーケットでの買い物を取り上げて分析することで、日常生活にまでシステムが入り込んでいることを我々に気づかせてくれる。

「する」論理、さらに言えば資本主義の論理はシステムとなっている。自由すらシステムとして組み込まれ、我々はそのことに無自覚なまま日常生活を送っていることが多い。文章を通じてそのことを知ったとき、高校生はこの社会をどのように感じるのだろうか。近代の成り立ちや現代社会のシステム化の流れを知ること、現代社会への問題意識や、批評



精神を育むためにも必要であろう。

■近代科学の終焉と新しい、科学の可能性

高度な消費社会の成立の前提となるのが近代科学であるが、現代はその科学がゆらぎはじめ、検証を必要とする段階にある。そのことは、すでに『国語総合 現代文編』にある黒崎政男「ゆらぐ科学のリアリティ」で指摘されている。

そうした状況を前提に読むと面白いのが、中村桂子「虫愛する姫君」である。生命誌という独自の概念を

提唱する中村は、「堤中納言物語」の「虫愛する姫君」を紹介し、毛虫をかわいがる姫を「現代のバイオテクノロジーにも顔負け」と絶賛する。「物事の本質を追究しようとする精神」に自然科学者としての資質を見、しかも、「対象との間に愛の気持ち」をもつ姫に、西欧型の科学を乗り越えている。新しい科学の可能性を見出している。

対象をよく観察し、そこに本質を見いだすということであれば、上田恵介「ウサギの耳はなぜ長い？」や鷲谷いづみ「生物多様性の恩恵」はその実践例にあたるといえるかもしれない。

上田の文章では、生き物同士がお互いを利用し駆け引きをし合いながら進化する、「共進化」という考え方について、具体例を交えながら紹介されている。また、鷲谷の文章では、環境に適應する歴史によって生

み出された生物の多様な「戦略」について解説された上で、それを応用した技術 (biomimicry) や発明について紹介されている。

人間が他の生物をどのように利用しながら生きるかについて考えさせられる文章として、養老孟司「自然に学ぶ」がある。オフイス業務者と第一次産業従事者の「現実」の違いについて指摘し、その上で、「自然に学ぶ」こととは自然の作り出す「形を知る」ことだと主張する。

高校生にとって「科学」というと、近代科学のイメージが強いかもしれない。そのような生徒にとって、これら自然科学系の文章は、大きな刺激を与えるのではなからうか。

■複雑な時代を生き抜く力を

情報化、近代の終焉と日常生活のシステム化、科学のパラダイムシフト……。こうした複雑な現代社会をいかに生き抜くかも、教科書教材の大きなテーマとなっている。それらを

前掲のマップ上では「いきる」というキーワードの周辺に位置づけた。

坂東眞理子「稼ぐだけが目的か」や立松和平「幸せの分量」、小関智弘「鉄を削る」などは、いずれも金銭目的以上の「働く」ことの価値について考えさせられる文章である。「女性の品格」がヒットした坂東の教材では、「働く」ことを通じた社会参加の意義、その喜びが述べられている。

いずれ社会の一員となる高校生が、自己を見つめ、社会で働くことの意義を考えることは、極めて有意義なことであろう。

グローバル社会に生きるということに目を向けると、青木保「世界はいま——『多文化世界』の構築」や山崎正和「心に『海』を持つて」がある。文化の多様性の擁護、文明の異質性をかみしめつつ他者とながらうとすること。今後、日本の枠を飛び出して活躍するであろう若者たちにぜひ伝えたいメッセージである。

眼をマップの下の方、「教育」に転じれば、山崎正和の新教材「文明と文化の教育」がある。ここで山崎は、「文明」と「文化」を区別し、前者は普遍性をもち伝搬可能なもの、後者は「身体化された文明」であり、価値判断を含み、容易には広がらないものであるとしている。

西欧的近代化、工業化による文明の時代は終焉を迎えつつあるが、そのような中で、これからの文明や受け継ぐべき文化について考えることも、未来を生きていく高校生には必要なことであろう。

■終わりに

以上の分析・考察はあくまでも一例にすぎない。時にはこのように、教材のジャンルや各文章のテーマを超えて、教科書教材を広い視野から見つめ直してみることで、新たな単元構成の可能性や、これまで気づかなかった教材価値を発見できることもあるのではないだろうか。

大修館「現代文」の新教材を

読む



「現代文 上巻」(現B300)・「精選現代文」(現B10)

「分かち合う社会」——筆者と対話する読み方を学ぶ

みやげよしぞう
三宅義藏
千葉県立生浜高等学校教諭

人間の社会では、人前で分配を惜しんだりしない。むしろ嬉々として、所有者が食物を分け、食事を振る舞つのである。いつたいなぜ、こんな不思議な行動が生まれたのだろうか。

評論文を楽しく読み、理解を深めていくコツの一つに、「筆者と語り合いながら読む」という読み方がある。

評論文の筆者が、「このことについて、どう思う」と問いかけてくる。読者は、「それは、こうだろう」と答える。その答えを想定していたように筆者は、「確かにそう思えるよね、しかし、それにはこういう問題があるんだ」と返してくる。また、読者が、「ちょっとわかりにくいな」とつぶやくと、筆者は、具体例を挙げてくわしく説明してくれる。

このような「対話」ができるようになる、読者はぐいぐいと筆者の語りに引き込まれ、興味深く、しっかりと筆者の思いを吸収していく。生徒たちにはこのような評論文の読み方を身につけさせ、そのおもしろみを味わわせたい。「分かち合う社会」はまさにそのような学習に最適な評論文である。

「分かち合う社会」の筆者である山極寿一は、食べ物を喜んで他者に与えるのは人間だけであるが、なぜ人間だけがこのような不思議な行動をとるのだろうか、と問題を提起する。そしてさらに論点を絞り、ピグミー、イヌイットなどの人たちの狩猟採集社会が食物を徹底的に分配する社会だと言われることを示し、狩猟採集社会の人たちが猟の獲物を他者に与えるのはなぜなのか、と問いかける。

ここで生徒には先を読むことを禁じ、筆者の問いかけに答えさせたい。

生徒からは、例えば、「猟をするのは男だろうから、獲物を女性にプレゼントすればモテるだろうし、部下に与えれば権力を強めることができる」という答えが返ってくるだろう。

あるいは、「狩りは常に成功するとは限らない。そこで、たくさん獲れたときに他者に与えておき、自分が獲れなかった時に『貸し』を返してもらおう仕組みだ」と答える生徒もいるだろう。

このような、筆者の問いかけに答える、という「対話」をした後、続きを読ませる。

筆者は言う。確かに、獲物の分配は男の繁殖戦略として理解可能という説はある、と。その答えを出した生徒は喜ぶだろうが、そこで筆者は「しかし」と逆接の言葉を出し、その考えが成立しない根拠を挙げ、否定する。

続けて筆者は言う。確かに、獲物が得られなかった時のための保障システムだという説もある、と。やはりその答えを出した生徒は喜ぶだろうが、ここでも筆者は「しかし」と逆接の言葉を出し、その考えが成立しない根拠を挙げ、否定する。

ここで多くの生徒は途方に暮れ、何か答えを出すヒントや新たな材料がほしいと心の中でつぶやくだ

ろう。その思いに応えるように、筆者は、ピグミーやブッシュマンの慣わしを紹介する。

この部分は特におもしろい。自分に槍があるのに、獲物を分配するためにわざわざ他人の槍を借りて猟に行ったり、大きな獲物を見ても誰も称賛せず、ハンター自身も自分の獲物つまらないもので申し訳ないという態度をとったりするなど、意外で興味深い事実が次々に示される。その上で、筆者は、これらの社会が、「分け与える」ことではなく、「分かち合い」の精神で成り立っているのだ、という考えを紹介する。

生徒には「分け与える」ことと、「分かち合い」の違いを考えさせ、明確に説明ができるかどうかを評価したい。その上で、筆者が与えてくれた材料とヒントをもとに、最初の問いかけに対して答えさせたい。筆者は筆者自身の答えを最後に明確に示しているが、生徒たちはそれを受け取り、自分の答えと比べながら、楽しかった「対話」を振り返るだろう。

以上のように、「分かち合う社会」は、「筆者と語り合いながら読む」という読み方のおもしろさを味わえるすばらしい評論文である。多くの高校生にぜひ読ませたいと、切に願う。



「精選現代文」(現B310)・新編現代文」(現B011)

「家族化するペット」と社会の変容

かどくらまさじ
門倉正二

元東海大学教授

一度豊かな家族生活を手に入れてしまうと、家族の絆を実感したいという欲求が表に出てきて、現実にならざるを得ない機会が少なくないことに不満を持ち始める。理想的な家族への欲求と、現実の家族への不満、そのギャップに入り込んできたのが、家族・ペットなのだ。

らぬまに自壊していたということではない。

この文章は、震災の後にそれを契機に書かれたものではなく、そのような大事件によって露呈された問題を取り上げているのではない。そうではなくて、平穏と見える時間の推移のなかで家族は存在し続けるのだが、その中に踏みこんで絆のありかたをみると、それほど安閑としてはいられないという危機感をモチーフにしているようである。

たしかに、映画やテレビドラマ、小説など多くのものが、家族の隠された悲劇を描き、それが多くの人々の関心と呼んでいることも思い合わされる。

■「家族の絆」への危機感

「家族の絆」の語は、特に大震災後に一段と大きな声で語られ、実際多くの人たちが家族そのものを失い、「絆」や支え合いや共生という語で呼ばれる人間の関係の大切さが再認識された。だが、震災は、絆以前に家族そのものを一方的に奪ったのであって、絆が断ち切られたのはその結果なのである。絆が知

■近代家族の状況

筆者は家族を、「近代社会における心理的拠り所——具体的に言えば、『自分を心配し、必要としてくれる存在』と位置付けて論を展開する。家族が

社会の基本単位の集団としてあって、最も直接に实际的に個人を支えるものだと考えるのは納得しやすい。仮に不幸な家族があったり、家族の体をなしていない家族であっても、それは本来のありかたではないという確信はだれでももっている。

「近代社会における」という限定をつけるのは、前近代社会は宗教や共同体が心理的な拠り所であったため、家族のみに拠り所を求めなくてもよかつたからだ。ところが近代社会になると人々は孤独を感じ、家族のみが拠り所となった。市場原理主義の社会は個人を大事にしないという現実もあり、個人にとって家族の重要さが格段に増大したというのが、筆者の分析である。家族の意味の変遷は、学習者に考えさせたい、大切な課題である。

■ペットブームの意味

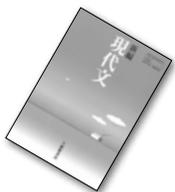
そこでペットである。「ペットを家族とみなす人」が増えてきている。それはなぜか。高度成長期には豊かな家族生活を築くべく「夫は仕事、妻は家事・子育てに忙しく、ペットが入り込む余地はなかった。」豊かな生活を築いていることで、自分が必要とされている実感がもてた。それが現在どうなのか、

と問いを発して、その答えが冒頭に引いた部分である。家族の中で自分が必要とされている実感が希薄になった。その空隙を、自分を素直に必要としてくれるペットが埋めてくれる。ペットブームの裏側に、「家族の絆」の希薄化があるのではないか。

■筆者とその発想

社会学の定義は難しいが、大小の集団を対象として、その本質や変化をさぐるものと考えられると、社会集団の基本単位である家族に着目してそのありかたと変容を問う家族社会学もその重要な一領域である。そんな分野があることも学習者に知らせたい。

筆者山田昌弘氏は『パラサイト・シングルの時代』『希望格差社会』などでよく知られた論者であるが、本教材文と重なる『家族ペット』という著書もある。着目する対象が身近な問題(たとえば、結婚・生活格差・福祉など)であるから、この社会を生きていく私たちも高校生たちも関心をもたざるをえないものばかりである。どういう時代のどんな社会に生きているかを考えるとき、まずは自分が具体的に生きている環境としての社会に目を向ける契機として、この教材を活用してみようか。



『新編現代文(現B3-1)』

「和の思想、間の文化」——脱ジャポニスムの日本文化論

いしづか おさむ
石塚 修

筑波大学人文社会学系准教授

日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。それを上手に言えば「間に合う」「間がいい」ということになり、逆に使い方を誤れば「間違い」、間に締まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け」になってしまう。間の使い方はこの国のもっとも基本的な掟であって、日本文化はまさに間の文化ということができらるだろう。

国際化社会でのグローバル人材育成が叫ばれているなか、日本の伝統文化があらためて見直されている。国語科でも「伝統的な言語文化」の指導が目ざされ、実践も数多く報告されている。だが、それらを扱う場合、たいていは歌舞伎・邦楽・書道・茶道・生け花といった、いかにも日本らしさを演出で

きるジャンルを並列し、ステレオタイプ的に紹介している傾向が強い気がする。この方法を安易にとると、かつての日本文化理解の典型とされた「フジヤマ・ゲイシャ・ハラキリ」といった、外国文化に〈ない〉存在を国際的に〈特殊な〉日本文化として紹介し、その特殊性にむしろ日本人が自己満足していた風潮へと回帰してしまう可能性が高い。ジャポニスムによる日本文化紹介のパターンから、われわれはそろそろ脱却する時期にきているのではなからうか。

ねたら、生まれて一度も体験がないと言われて仰天したという話をよく聞く。この話は、もはや日本の伝統文化を「モノ」としてとらえ紹介することの限界を示しているのではなからうか。では、茶道や歌舞伎といった「モノ」から、発信すべき内容をどう変えていくべきなのか？

それは、「ココロ」への転換である。「ココロ」というと民族主義的に考える人もいようが、それはあまりに短絡的発想であろう。この文章を取りあげた大きな理由の一つは、これまでの日本文化の理解パターンから生徒たちを脱却させるためのきっかけを作ってもらうためである。

私自身の海外での経験(茶道についての紹介をチュニジア・ウズベキスタン・フランスで実施)から述べると、海外では「序破急」など、日本文化の特長をテーマに提示し、それぞれのセッションから受講者たちのイメージを広げる形が求められる。「モノ」(ジャンル)の知識より日本文化の内包するテーマを理解しておくことは、国際社会で日本を紹介する際にとっても役立つ。その点において、この文章でとりあげている「和」や「間」はまことに適切なテーマになる。たとえば「和」からは「平和」といった

外国に〈ない〉存在を日本の伝統文化として認識させることは、日本人の生活が西欧化している現状では、日本人そのものが日本の伝統文化を〈ない〉存在として受容していることの裏返しにほかならない。日本への留学生たちから、日本で茶道を一年間に五回も体験したが、同じ大学の日本人の学生に尋ねると、抽象的な概念のみをイメージしがちであるが、「和える」という和語と関連させると、日本人が「異質のもの同士が調和し、共存する」ため「和」の思想を大切にしてきたことが理解でき、茶道の「一座建立」の意味の理解にも通じる。

小学生から英語を学ぶことが推奨されているが、ある大手電機メーカーの国際部の方が、語学は「鬼に金棒」の「金棒」であり、「鬼」の存在がなくてはたまたの「棒」にすぎないと、ある席で話していた。第二外国語の前提にはまずは国語への深い理解と造詣が必要なのだ。

たった一文字の漢字。「和」。そこから、「この字は、わが国の文化の特徴をたった一字で表しているといえる。というのは、わが国の生活と文化の根底には互いに対立するもの、相容れないものを和解させ、調和させる力が働いているのだが、この字はその力を暗示しているからである。」という日本文化の持つ底力を見つけて出している長谷川氏のような眼力がなくては、国際化社会で活躍できるグローバル人材となり得ないことに、この文章を通して学習者に気づかせることが、なによりもこの教材の目的といえる。



『現代文 上巻』(現B308)・『精選現代文』(現B310)

「巨人の接待」(小川洋子)の言葉

閉じこもること、あるいは〈耳を澄ま〉すことについて

たかねざわのりこ
高根沢 紀子

立教女学院短期大学専任講師

これらは皆、絶滅した鳥なんだ、と私は気づく。仲間とはぐれ、一人ぼっちになった鳥たちが延々と一つの円を描き続けている。これに乗っている限り、どこへも移動しなくていいのだという安堵に包まれるように、巨人はつとりと目を細める。

作品は、世界的な作家である〈巨人〉が、来訪した国で熱烈な〈接待〉を受ける様子が、通訳である〈私〉の目を通して語られる。特に事件は起こらない。しかし、読むものは「言葉とは何か」という問いにぶちあたる。グローバル化する現代において、世界共通の言葉を得ることは必須であり、インターネットによって、世界中とつながることはあたりまえのこととなっている。ならば世界中に読者を持ちながら、

がら、(一言も英語を喋ら)ず、地域語のみを話し、自分の世界に閉じこもる〈巨人〉は、むしろ世界とつながることを拒んでいるようにも思える。そもそもこの作品は矛盾に満ちている。〈巨人〉は、〈巨人〉と呼ばれながら、〈小柄で、ひどく痩せている〉(ただの地味なお爺さん)で、招聘に応えたくせに積極的に〈接待〉を受けようとはせず、質問に答える言葉は少なく、その声は、異様に小さい。強制収容所へ送られ、家族を失い苦難の連続だった〈巨人〉にとって、小鳥は、〈人を焼く煙を越えて自由に外の世界と行き来できる〉象徴であったが、戦争が終わった今は、小鳥を飼い(閉じ込めて)、自らも一切の移動をせず、一カ所に閉じこもっている。〈巨人〉の飼う鳥は、すべて留鳥であり、〈巨人〉の胸に飾られる、ホロホロ鳥、メリーゴーランドで、〈巨人〉の選んだドーローは、飛べない鳥である。

絶滅した鳥たちは、同じ場所を回り続ける。

〈巨人〉の〈言葉〉を翻訳する〈私〉は、通訳という役目に反して、〈巨人〉の言葉を〈捏造〉する。〈捏造〉した言葉に感動する読者たち、的外れな〈接待〉をする編集長、すべてがちぐはぐに思える。

〈巨人〉が、一つの言葉にこだわるのは、語る相手との距離を少しでも縮めたいからだ。言葉は、自分を語る道具であるが、それは、どのような場合でも、あくまで翻訳であり、自分の心とは、完全に一致することはないという矛盾を抱えている。〈私〉が、〈巨人〉の〈言葉〉を深く理解するために、〈巨人〉の使う地域語を学ぶ必要があったように、翻訳は、〈巨人〉そのまゝを伝えてはいない。

しかし〈巨人〉は、やはり偉大である。〈巨人〉が口を開けば〈人々は言葉以上に多くのものを受け取〉り、〈星雲に浮かんだ羽根は聴衆の誰一人予想もできない遠いところまで流れてゆき、姿が消えた跡には新星が誕生〉する。

〈巨人〉が語りかけるのは死者であり、読者が読むのは、死者の《記憶》だ。それは、〈巨人〉が選んだドーローは、絶滅した鳥で、現代には失われた死者だが、「巨人の接待」が読まれ、『不思議の国の

アリス』が読まれる時、ドーローは、いつでも生きるものとして人々に《記憶》されるということである。〈巨人〉がどのような作品を書いているのか、具体的には示されていない。しかし、それらが個人的に閉じられたものであると同時に、世界中の人たちに開かれているものであることは分かる。

読者の代表である〈私〉は、〈巨人〉の声に〈耳を澄ま〉す。ただ聞くのではなく、心を澄ますことが重要であるのだ。現代は手を伸ばしさえすれば、さまざまな情報が手に入る。しかし、立ち止まって〈耳を澄ま〉すことは、忘れられているのではない。世界の言葉を話せることは、世界とつながることに違いないが、深く理解し、感じることは、実は別のことではないか。

鳥籠は小鳥を閉じ込めるための籠ではありません。小鳥に相応しい小さな自由を与えるための籠です。(「ことり」朝日新聞出版、2013)

読書は、閉じこもりながら、最も広い世界へと私たちを導いてくれる。現代こそ、自分に相応しい〈自由〉を手に入れるために、閉じこもり、〈耳を澄ま〉すことが必要とされる時代である。



『現代文 上巻』(現B300)

竹西寛子「蘭」の〈語り〉とその批評性

にいみきみやす
新見公康

都留文科大学文学部特任教授

しかし、ひさしは、その一方で、ずっと大切にしてきたものを父親に裂かせたのは、自分だけではないかもしれないとも思っていた。

人は関係性の中で生きている。他人との関係性、物事との関係性。ひさしとその父親や、我々自身も、それぞれがそうである。さらに、作品の〈語り〉が関係を生成するのだから、語りの在り様を見極めるのは重要である。何がどのように語られ、何が語られなかったか。その見極めが、読者である我々が〈我〉の時空にいかに関わるかにつながる。だから、それぞれの〈語り〉に能動的に付き合うことから始めなければならない。

「蘭」の〈語り〉は、何を語って何を語らなかったか。冒頭の一文から、戦時下での生活の一齣、そ

れも限られた空間「列車の中」が描写される。国民服やモンペ姿、買い出しの荷物が時勢を表す。

現実には、昭和十五年の大政翼賛会発足、日独伊三国同盟締結、翌十六年に日米開戦となり、十七年には〈欲しがりません勝つまでは〉の標語が全国を覆った。「戦争をする相手の国が増えて、質素と儉約の生活を政府が勧める」という「蘭」の叙述と時期が重なる。しかし、「蘭」では、昭和何年、広島などとの具体的な日時や場所についての〈語り〉は無い。だからこそ逆に、一少年ひさしに起きたことは、子供時代のあったかもしれない確かな感覚として普遍性がそなわり、印象が強まる。その子供の視線と確かな感覚を支えているのが〈語り〉である。

父親の愛情は、今後息子を連れて旅する機会は無くなるだろうという時勢の予想の下でひさしを「葬儀」に連れて行ったことと、ひさしの歯痛解消のた

めに大切にしていた扇子で蘭が描かれていたのを引き裂き、楊子を作ってやった行動に表れている。

父親との旅においてひさしは、父と同業の故人の愛人であろう「女将」が葬式にも出られず悲しむ姿に「人生の奥行きのようなもの」を感じ、また、父親に対しては「やむを得ない場所では否応なしの勤めをさせられているように見える」のを「気の毒にも健気にも思い始めていた」との感情をもった。子供から抜け出つつある感覚が鮮明になる部分である。

ところで、父親は、ひさしの歯痛を心配した後、「また、元のように目を閉じた」のであり、同じように、ひさしについても、父親や「あの女の人」を思いながら、「列車の振動に身をまかせて」、「ひさしもやがてゆっくりと目を閉じた」のである。実は、この「も」を吟味すべきで、ここに〈語り〉の姿勢がつよく現れている。

「蘭」は、戦時下という状況での少年ひさしの確かな生の感覚を提示した。「歯痛」は、その典型であり、象徴でもある。しかし、一方で、父親、ひさしともこの状況を変えるべくもないことも、結果として語られている。「ずっと大切にしてきたものを父親に裂かせた」何かを感じ始めたひさしも、「列

車の振動に身を任せ」父親の姿を継ぐばかりなのである。このように〈語り〉が展開されているのが重要で、そこに結果として批評性が表れていることになる。すなわち、この〈語り〉は戦争の不条理を感じつつも、庶民の加害者の姿をも見据えている〈語り〉であると解釈でき、また、さらにこれを含みそのような状況をもたらした戦争そのものへの批評であるとも受け止めることもできるのである。

広島で生まれ、十六歳の時自宅で被爆した体験が作家竹西寛子にある。竹西は、「被爆経験を特別視するのも、特別視されるのもいやで、経験の一般化、客観化に気持を集めていた。」(「大人の代役ではない少年」『兵隊宿』講談社文芸文庫、一九二)と『兵隊宿』刊行の昭和五十七年当時を振り返る。「蘭」を含む小品集『兵隊宿』の九篇には、「共通の主人公」ひさしが一貫し、「確かなことは、目的などいっこうに分からなくても、やめると言われるまで土を掘り出さなければならぬということ、その作業から自分ひとりだけが逃げ出すわけにはいかないことである。」(『猫車』)などというひさしの感覚も類似する。四十年の時空を越えて〈語り〉が躍動している。

今こそ古典を読む



『新編古典(古語総合)』

百人一首を高校生と楽しむ

おくむらじゅんこ
奥村準子

筑波大学附属坂戸高等学校教諭

一、グローバル社会に求められる「古典」

昨年九月に「古典の日」に関する法律が公布・施行され、十一月一日は国民が古典に親しむ日と定められた。私は高等学校の部活動で競技かるたを指導しているが、漫画「ちはやふる」(末次由紀著)のブームで百人一首に興味をもった中高生に最近よく出会う。インターネットで世界中の情報が簡単に手に入る時代に日本の古典文学やそれを用いた競技に関心をもつ子どもたちは、多文化共生時代を生きるための「文化的アイデンティティ」を探し求めているように感じる。

今年度から順次施行される高等学校国語科の学習指導要領では、日本の「伝統的な言語文化」を尊重する態度育成の重要性が強調されている。百人一首も継承すべき伝統的な言語文化として高等学校の国

語科で「韻律をふまえた短歌の現代語訳」(本校ではこれを俵氏の著作名から拝借し「チョコレート語訳」と呼んでいる)を課し、国語科の選考によって優秀作品を表彰するなど、幅広く生徒が興味関心を喚起するよう務めている。

たとえば無口な男子が思いもかけないスイートな恋歌を翻訳してきて周囲を驚かせるなど、生徒の意外な一面を発見する学習活動になる。生徒の発達段階や学習歴の実情に合わせた授業展開を工夫すると百人一首は楽しい教材となる。

語教室でも積極的に活用したい。

二、発達段階に応じた「百人一首」授業展開の工夫
新しい『新編古典』(古典B)の教科書はオールカラーの折り込みで百人一首の全歌が掲載され、大岡信氏が紹介する「百人一首の恋の歌」とコラム「古典の窓」が前後に付してあり、様々な活用方法が考えられる。

勤務校では高校一年生の国語総合の授業の一環としてクラス対抗かるた大会を開催しているが、競技の形式に対する関心意欲の度合いは高校入学時までに「百人一首に触れた時間」の差によって異なり、経験の少ない生徒にとっては必ずしも楽しい時間にはならないと感じている。そこで、かるた大会に向けた冬休みの宿題では、俵万智氏の文章「短歌を訳す」(『国語総合 現代文編』『精選国語総合』)で登場す

三、「歌合」を做ったプレゼンテーション合戦

新しい取り組みとして、平安宮廷文化の遊宴行事である「歌合」の形式を取り入れたプレゼン合戦を高校二年生の古典単元学習として実践してみた。百人一首から部立ごと(ぶだて)に和歌を番(つが)わせ、二人一組で担当する和歌を紹介しながら番の和歌との比較や魅力を説明し、対戦する二人と勝敗を競う形の学習である。口語訳・作者紹介・出典と部立や文法事項の説明に加え、参考文献を調べて著者による歌の評価、自分たちが考えた歌の魅力、前述の「チョコレート語訳」などを紹介させた(次頁参照)。

各組の発表は五分、他の部立を発表した四名が自分達と別の対戦を評価し、合議により勝敗を決した。評価の観点は、

- ① 音読・発表
- ② ペアでの協働作業
- ③ 歌の魅力(詞書の理解)
- ④ 番の歌との比較
- ⑤ 和歌の修辞
- ⑥ チョコレート語訳



「クラス対抗かるた大会」の様

の六項目三段階とした。教員二名と生徒評価者四名がつけた評価は、点数の平均値は異なるものの勝敗はほぼ合致する結果となった。勝敗の発表は、歌合の「判詞」を紹介しつつ根拠を述べる形で発表させた。授業者が百人一首から番にして取り組ませた和歌は次の通りである。

春 「ひさかたの」 対 「ひとはいさ」
 秋 「あらしふく」 対 「むらさめの」
 冬 「かささぎの」 対 「あさぼらけ有明」
 羈旅 「あまのはら」 対 「このたびは」
 恋① 「かくとだに」 対 「たまのをよ」
 恋② 「ちぎりきな」 対 「なげきつつ」
 雑 「おほえやま」 対 「よをこめて」

生徒たちからは、「作者が有名な別の人と深い関係があることが多くて、面白いと思った」「日本人の深い感情をよく知ることができたと思う」などの感想に加えて、単元冒頭の質問紙調査で古文に対する「嫌い・苦手」意識の強かった生徒が「文法や修辞をおもしろいと感じた」と回答してくれたことが成果と感じた。これからも「歌合」学習のドラマを楽しみながら、生徒たちを豊かな言葉の担い手に育てていきたい。

チョコレート語訳

何回目？ あなたの嘘は
 聞き飽きた
 私の心は 受け入れ拒否

歌の魅力

“男の誘いを巧みな言葉で切り返す”

◎ 修辞、解説！

- ・逢坂 = 大阪
- ・夜をこめて = 夜の明けないうちに
- ・聞 = 清少納言の心のドア

生徒のプレゼンテーション資料

清少納言「よをこめて」を担当した2人は熱心に意見を交換して発表資料を作成した結果、両者が自分の言葉で歌の魅力を述べ、番の歌「おほえやま」との比較で「切り返す」という共通を見出すことができた点を評価した。

番の歌との比較評価

夜をこめて 鳥のそらねは はかるとも
 よに逢坂の 聞はゆるさじ

→ 誘いを切り返す

大江山 いく野の道の 遠ければ
 まだふみもみず 天の橋立

→ 雑味を切り返す



『古典 漢文編』(古3011)

中国史への視点——『史記』に描かれる歴史の裏側

たかのゆきお
高野由紀夫

元日本女子大学附属高等学校教諭

史伝教材は、その優れた物語性と史実に裏付けられた着実さから格好の漢文教材といえる。また、世界史で学習する中国古代史との関連から、生徒の知的好奇心に働きかける力も強い。

その一方、古典としての価値も高く是非教材として読みたいと思えるものが多いにもかかわらず、その魅力を伝えるのは簡単ではない。ここでは、高校教材として定着している「漢楚の興亡」に描かれる項羽と劉邦に匹敵する人物として、秦の始皇帝嬴政えいせいに注目して見てみよう。「嬴」は秦王家の姓、「政」は始皇の名である。）

■秦始皇と呂不韋

元来、秦は『史記』でかなりの比重を占めていて、「秦本紀」「秦始皇本紀」「項羽本紀」「高祖本紀」や諸世家、多数の人物の列伝に広がっている。中でも

始皇帝は特に重く、単独に「始皇本紀」がたてられる異例な存在だ。秦王朝にとっても、中国全土いや人間世界全体の歴史からしても重要な人物といえる。ただ、その誕生から死までを通観するのは、魅力的ではあるが記述が膨大すぎて難しい。

そこで、例えば呂不韋りよふいをキーパーソンとして始皇の人物像を見るのはどうか。この呂不韋は、商人から身を起し、始皇帝の父子楚を支援し、宰相の地位を得る人物である。その台頭を描く中から、秦王政がどのような人物であったかを理解することができないだろうか。

■始皇帝の父——子楚

「奇貨居くべし」の故事成語でも知られる通り、戦国時代末期、豪商呂不韋は、趙に人質として送られていた秦の皇子子楚を強力に支援した。当時、秦

は昭王（鶏鳴狗盗）の故事にも登場する王）の時代で、太子が亡くなって次男の安国君が新たに太子となった。しかし、この安国君には跡継ぎがまだ決まらず、また、安国君の寵愛する華陽夫人には子がいない。そして子楚は、庶子ではあるが跡継ぎの資格充分。これが、利に敏く状況を鋭く見抜く商人呂不韋の狙ったスキマである。

子楚に近づき、「私は、あなたの門を大きくすることができませんぞ。」と話しかけると、「ご自身の門を大きくするのに努めなさい。」笑いながら子楚は応えた。それに対して呂不韋は、ねらい通りの決めた後で初めて大きくなるのです。」この言葉で呂不韋の真意を理解した子楚。密談が始まり、重要な一言でその謀議が結ばれる。「おっしゃる通りになった暁には、秦国をあなたと分けあいましょう。」

司馬遷は、この密談の場所について謀議を自分の耳で聞いていたわけではない。先行する諸書の記述も参考にしながら、自ら得た資料に拠りつつ「物語的に」再構成しているのだ。勿論、司馬遷は物語を語るうとしたわけではないだろう。我々にとって、その筆の描き出すものが、物語としての魅力を秘めて

いるという意味だ。このように、物語的に歴史をその裏面まで語る態度は、『史記』記述のいたる所に顕著であり、またそれを通して語られているのは、後に秦王となる子楚と呂不韋の密約の存在という史実で、これにより、やがて秦帝国宰相の地位を一介の商人が手に入れることになる。

■続く部分の概要

以下には、呂不韋の計画通りに事が運ぶ様が続く。

- ・子楚が安国君の跡継ぎとなる
- ・子楚の子——始皇帝（政）の誕生
- ・子楚が秦王となり、政は皇太子となる
- ・政が秦王となる

子楚は安国君の跡継ぎに、呂不韋は子楚の後見役となる。そして語られるのは、政の誕生をめぐる「歴史」の裏面である。秦王となった子楚は、約束通り呂不韋を宰相として「秦国を分けあつた」。後に、政が秦王から始皇帝となり、絶大な権力をふるうことになるのは世界史で学習する通りである。

このような裏面をも語る『史記』の学習を通して、「歴史を資料から直接読み解く」という、魅力的で具体的な体験が得られるのではないだろうか。



教室から黒板が消える？

——デジタル教科書のこれから

信州大学教育学部教授
ふじもり ゆうじ
藤森 裕治

■デジタル教科書先進国の授業風景

イギリスや北米、オセアニアでは、初等中等学校の九割を越える教室に大型の電子黒板 (interactive white board) が配備されている。それに伴い、教科書や教材のデジタル化が進んでいる。平成二三年の冬、教科書研究センターの委嘱を受けて訪問したニューヨーク市郊外の公立高校でも、全ての教室から黒板が消えていた。

教員経験二十年以上のベテランの女性教諭に、電子黒板に取って代わられた事態をどう受け止めたか尋ねたところ、次のような答えが返ってきた。

「数年前の夏休み明けのことよ。長期休暇を終えて学校に戻ってきたら、教室から黒板がなくなっていたの。そのときは本当に面食らったわ。明日からどうやって授業をすればいいの？ ってね。でも、馴れるのにそう時間はかからなかったわ。電子黒板の魅力は、掲示したデジタル教科書

である。インターネットを経由すれば、詳しい検索や遠隔地の施設・機関との連絡などもたやすい。

■フューチャースクール・プロジェクト

総務省では、平成二十二年度から三年計画でフューチャースクールというプロジェクトを立ち上げ、ICT教育の振興を図っている。全国に二十校の実証研究校を指定し、子ども一人に一台ずつタブレット型の端末やパソコンを貸与して学習指導の開発を求めるといふものである。生徒は、個別学習や集団学習を進めるための問題集やワークシートに記入したり、映像や音声を伴う資料などを映し出したり、デジタル機能を使って取材をしたりする。

ちなみにアメリカ合衆国やイギリスでは、廉価な個別学習用の教材ソフトが大量に出回っている。総務省の事業は、この後、文科省の「学びのイノベーション」プロジェクトに引き継がれる予定である。

■未来の教室はどうなるか

それでは、日本の教室から黒板が消え、生徒たちがタブレット型の端末やパソコンを駆使してデジタル教科書・教材で学ぶ日常はいつ到来するだろうか。この問題の大本にはインフラ整備にかかる財源や教科書検定制 (現在は電

に書き込んだ記録をそのままパソコンに保存できることね。次の授業を始める時に、前の時間の画面から続けることができるから、授業が途中で終わってしまったって心配ないのよ。同僚が集めた資料や自作の教材を共有して、好きなタイミングで掲示できる点も捨てがたいわ。今では、黒板にチョークを使っていたのが遠い昔のことよね。」

■「掲示型」デジタル教科書

黒板が電子黒板に代わると、私たちは否応なく「掲示型」と呼ばれるデジタル教科書を使うことになる。掲示型のデジタル教科書は紙媒体の教科書を電子化したもので、日本でも複数の教科書会社から供給されている。

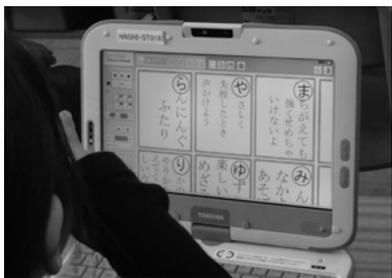
基本的な構成は紙の教科書と同じだが、デジタル化されていることによって、文字の拡大や縮小はもとより、資料となる動画や音声の再生、マーキングや書き込みなども自在にでき、板書内容をパソコンに保存しておくことも可能

子媒体のテキストは検定教科書として認められていない)、著作権の問題等があり、ごく近い時期と言いつてもいいことはない。特に、洋の東西を問わず、デジタル教科書・教材の使用に際しては、ICT専用の支援員確保がきわめて重要だと指摘されている。その人的措置の問題もある。

しかし、例えば佐賀県教育委員会では、県としてICT教育の推進を掲げ、電子黒板とタブレット型端末を用いた取り組みを展開している。フューチャースクールの指定を受けた長野市立塩崎小学校の先生方は、初年度こそ機器の取り扱いに当惑したものの、三年目にはタブレット型のパソコンを駆使して課題探究学習やグループでの交流学习を

展開するのが日常になり、今やこれらがかけがえのない教材として機能している。

携帯電話が出回り始めてわずか数年で私たちの生活に深く浸透したように、「黒い板に白い粉の塊をこすりつけて文章を書いていた時代があったね」と笑い話にされるのは、そう遠くない時期のことかもしれない。



タブレット型パソコン



電子黒板を使った授業



【WEB国語教室】連載

教材研究の実際

—すべては教材研究のために

塚田 勝郎
つかだ かつろう
筑波大学付属高等学校教諭

七つの顔を持つ教師

若い方はご存じないでしょうが、昭和二、三〇年代に「七つの顔の男」というシリーズ映画がヒットしました。映画小僧だった筆者は、その主人公、片岡千恵蔵扮する多羅尾伴内たはなの「ある時は……、またある時は……」。しかしてその実体は……」という決めゼリふを、今でも覚えています。

私たち高等学校の教員も、「七つの顔」は大げさですが、「ある時は国語教師、ある時はクラス担任、ある時は生徒指導部の一員、またある時は野球部の顧問」というぐあいには、いくつもの「顔」を持っています。この中で、教科教育のプロとしての「顔」がもっとも重要であることは、言うまでもありません。理想としては、授業とその準備に勤務時間の大半が費やされるべきでしょう。しかし、現実はそのようではありません。近年は教員を取り巻く環境が変化し、

広義の教材研究

前段で述べたように、多岐にわたる教員の仕事の中核に位置するのが授業と教材研究です。教材研究というと、語の響きから授業の予習が連想されるかもしれませんが。しかし、直近の授業とは直接関係のない様々な活動も、広義の教材研究と言えます。たとえば読書がそうです。漢文の教材研究に漢文関係の書籍を読むのは当然ですが、直接漢文に関わらない幅広い読書も、豊かな授業作りに役立つはずです。ある公立高校の若い先生が職員室で読書していたところ、教頭先生から「本など読まずに、仕事をしろ。」と叱責されたと聞きました。学校現場でさえ教材研究が軽んじられている象徴的な出来事です。

旅行、映画鑑賞、講演会や研修会への参加などの活動も、広い意味での教材研究と言ってよいでしょう。旅行と聞いて奇異に感じる方もあるでしょうが、中国旅行経験者の行う漢詩の授業と、中国旅行未経験者のそれとは、どこか異なるものがあるはず。同様に、その他の活動も、漢文を教えるための土壌を豊かにし、授業にふくらみを与えてくれるにちがいません。

同僚との情報交換も、教材研究に大いに役立ちます。さらに、先輩教員に漢文の専門家がいたら、しめたものです。

生徒指導や保護者対応、会議、報告書類の作成など、教科教育以外の仕事に忙殺されて、教材研究にあてる時間が減りつつあるのが実情です。

筆者には、教材研究をめぐって苦い思い出があります。実は長年教員をしていると、教材研究が十分でなくとも、授業ができてしまうのです。筆者も四十歳代に、生徒指導の合間を縫って教室に駆けつけ、授業が終わると再び生徒指導の場に駆け戻るといった経験を何度もしています。正直に言えば、教材研究に割く時間は、ほとんどありませんでした。その頃の授業は、おそらく形だけの、中身のない薄っぺらなものだったにちがいません。当手を振り返ると、自らの傲慢さと考えの浅さに、恥ずかしさを覚えます。今回は、よりよい漢文の授業を作り上げるための教材研究に焦点を絞り、そのあるべき姿と手順を探ってみましょう。

何気ない一言にヒントが見つかることもありますし、書籍からは得られない、貴重なアドバイスを受けることもあります。

教材研究の実際

では、狭義の教材研究、直近の授業に備えての教材研究は、どのように進めるべきでしょうか。その手順と留意点を以下のように考えます。

- 1 ノートを用意する
- 2 参考文献を探す
- 3 教材を音読する
- 4 語句の意味を調べる
- 5 重要句法を確認する
- 6 現代語訳を作る
- 7 授業計画を立てる
- 8 板書のイメージを考える
- 9 発問事項を想定する
- 10 補助プリントを作成する

1 教材研究用のノートを用意する。まず担当学年別にノートを一冊ずつ用意します。資料のコピーも、このノートに貼ります。気をつけなければならないのは、必ず縦書きにすることです。板書も含めて、国語の授業はすべて縦書きです。余談ながら、筆者が教育実習生に最初に課すのは、教室の黒板に自分の氏名を縦に書く練習です。国語教師を志す以上は、平素から縦書きに親しんでおく

必要があります。

2 参考文献を探す 教科書に直結した指導書だけに頼るのではなく、教材に関係する書籍を幅広く探します。たとえば『論語』を扱う前には、『論語』に関係する文庫や新書を最低でも一冊読んでおきたいものです。故事成語や史伝、漢詩の単元も同様です。文献探しには、指導書の「ブックガイド」などが役立ちますが、新しく出版されるものも多いので、普段からアンテナを高くして、情報を集めておく必要があります。全国漢文教育学会発行の雑誌「新しい漢字漢文教育」（年二回発行）には、教材研究に役立つ新刊書が毎号数点ずつ紹介されていて、重宝します。

3 教材を音読する 漢文の授業は、教科書の音読から始まります。筆者の場合は、生徒に読ませる前に、自身が範読します。教師の読みがあやふやでは、生徒の理解は深まりません。音訓読み分けのルール（この講座の第一回で扱いました）を手引きとして、読みを確定すると同時に、思い込みで誤った読み方をしないように、指導書や注釈書でも読みを確認しましょう。また、朗読の練習も欠かせません。授業の直前には、必ず教材を朗読する習慣をつけたいものです。

4 語句の意味を調べる 教科書の脚注や指導書の語釈を参いましょう。

8 板書のイメージを考える できればノートに板書のイメージ図を書いてみましょう。もちろん縦書きです。句法の説明などは、前もって板書内容を考えておかないと、授業が停滞してしまいます。

9 発問事項を想定する 授業が平板にならないように、積極的に発問を取り入れたいものです。教科書にある脚問に加えて、オリジナルの発問も用意しましょう。発問の内容は、「漢和辞典で意味を調べてみよう。」という平易なものから、「登場人物の心情を考えよう。」のような高度なものまで、できるだけ多く用意し、生徒の反応を見ながら使い分けます。

10 必要に応じて補助プリントを作成する 教材の性質にもよりますが、プリントはあくまでも補助的な存在であることを忘れてはいけません。プリントが配られると、途端に安心して、授業を聞かなくなる生徒も少なからずいるのです。中学校でよく用いられるワークシートも、使用の目的や場面を考えて、慎重に扱うべきでしょう。

以上が直近の授業に向けた教材研究の、最低限の内容です。新しい教材を扱う時には、一時間の授業のために、ベテラン教員でも、教材研究に二、三時間を要します。教育

照しながら、語句の意味を確認し、重要な点はノートに書き込みます。必要に応じて注釈書にも当たりますが、教員の習性として、調べた結果をすべて授業に出してしまいがちです。授業で触れるものとそうでないものとの取捨選択が必要です。

5 重要句法を確認する 語句と同様に、重要句法（句形）についても調べ、ノートに記載します。ここでも、どの句法を詳しく教えるかという吟味が必要になります。教科書によつては、巻末に「重要句法のまとめ」などの名称で句法を一覧できるページを設けているものがあります。巻末の付録の存在を知らない生徒も多いので、授業中に情報提供をして、利用を促しましょう。

6 現代語訳を作る 指導書や注釈書を参照しながら、オリジナルの現代語訳を作ります。これをノートに書き込んでいけば、自然と記憶に残り、ノートやメモを見ながら授業せずに済みます。授業は生徒の表情を見ながらするものです。ノートやメモに頼ってはいけません、生き生きとした授業は実現しません。

7 授業計画を立てる 授業計画は、採用試験で要求されるような綿密な指導案ではなく、ラフなものでいいのです。「ここはしっかり理解させよう」「この点は全員に考えさせよう」という形で、授業の柱を何点か立てておくこと

実習生や新任教員の場合には、さらにその数倍の時間がかかるでしょう。もし勤務時間内に教材研究が終わらなければ、勤務終了後も居残って続けるか、家に持ち帰らざるを得ません。

では、どこまで教材研究を行えばよいのでしょうか。現実的には、授業が滞りなく行える段階まで準備できれば可とされるでしょう。しかし理想的には、その教材を教師自身がおもしろいと思えるまで教材研究を積み上げるべきです。教師がおもしろみを感じない教材が、生徒を惹きつけるはずがありません。

あるベテラン教員が、「教材研究を十分に行った授業は、生徒の食いつきがちがう。」としみじみと語るのを聞いたことがあります。これには、筆者もまったく同感です。瘦せた授業ではなく、豊かでふくらみのある授業を常に展開して、漢文好きの生徒を多く生み出したいものです。

今回は、入門期の教材に即して教材研究の具体的な手順を考えます。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に7月頃アップする予定です。

1 教育年限と教育任務の異なる学校種の多様性

ドイツの学校教育制度は、わが国のような単線型ではなく、初等教育（基礎学校・六歳から四年間）を終えた後の中等教育段階において、教育年限と教育任務の異なる多様な学校種が設置される複線型を描く。例えば、わが国の中学校に相当する前期中等教育段階（ゼクンダ段階Ⅰ・十一～十六歳）には、基幹学校（五～六年）、実科学校（六年）、ギムナジウム初級・中級段階（六～八年）、また高等学校に相当する後期中等段階（ゼクンダ段階Ⅱ）では、大学での学術研究の準備教育と普通教育を旨とするギムナジウム上級段階（二年間・十七～八歳）と並んで、様々な学校形態を見せる職業学校（二～三年間・前期中等の修了資格を有する十六歳から進学できるが、実際には二十代の生徒も通学。校種としては、職業専門学校、専門上級学校、職業上級学校、職業コレクなど）に大別され、さらには中等教育段階を貫く総合性学校なども設置されている。

このことに起因して、ドイツではそれぞれの学校種ごとに固有の教育カリキュラムが設定され、加えてそれは十六の連邦州ごとに独自性を見せるため、わが国のごとく中高単一の教育カリキュラ

修辞学、意見文や文学解釈文の作成が、学習領域③では文学史を背景とした文学作品やメディアの解釈が、学習領域④では文法と並んで、言語史や言語の機能など言語学入門が教科内容の重点を形成している。

それに対して職業学校の国語科では、部分的には上記の普通教育学校に重なりつつも、(将来の)職業生活の場に直接つながる実用的コミュニケーション能力の育成が、カリキュラムの基調を成している。例えば、ノルトライン・ヴェストファーレン州の職業コレク【国語科/コミュニケーション科】のカリキュラムでは、①コミュニケーションの切り結びと組織化、②情報の処理、③テキストの作成とプレゼンテーション、④テキストおよびメディアの理解の発展、⑤利益の主張と交渉という五つの学習領域に従い、対人関係構築力や職業における協同性、情報処理・活用能力、実用文書の作成、文章の実用面からの考察、商取引のコミュニケーション能力など、ギムナジウムを中心とした普通教育学校には見られない、職業教育に特化した国語教科内容が規定されている。

3 国語科の授業実践

ドイツの学校教育で用いられる教科書は、国家

【WEB国語教室】運動

世界の「国語」教育事情 第4回 ドイツ

つちやま かずひさ
土山 和久 大阪教育大学

マイスター制度の歴史をもつドイツでは、職業学校の充実や、資格の重視といった特色が見られます。そのような背景のもと行われる、ドイツの「国語」教育は、どのようなものなのでしょうか。

ム（学習指導要領）に基づくと、一つの国語教育ではなく、学校種や連邦州の多様性と独自性を反映した、多様な国語教育が形成されている。

また、ドイツは厳密な資格社会であるため、中等教育段階以降の各学校種には資格認定に繋がる修了試験が課されるようになっており、例えばギムナジウム上級段階修了時には「アビトゥア」と呼ばれる高等学校修了資格試験が課され、その成績をもって大学に（生涯にわたって何度でも）入学が認められるし、各種職業学校においてもそれぞれの養成職種に向けた資格試験や高等教育の専門学校に進学する前提となる「専門アビトゥア」が課されることになる。

2 国語科の学習領域と教科内容

前述の「多様な国語教育」のカリキュラムを包括的に概観すると、ドイツの普通教育国語科カリキュラムは、わが国の教科領域構成に類似して、①話すこと／傾聴すること、②書くこと、③読むこと／文学メディアとの交流、④言語の省察という四つの学習領域から構成されている。

後期中等教育段階での普通国語教科内容を素描すると、学習領域①・②では、情報伝達やプレゼンテーション、論証やスピーチを軸とした実践検定制ではなく州ごとの認可制によって採択され、認可された複数の教科書（公社）から教師は自由に選択できる。同一教科書会社の同名の教科書であっても、各州の政治理念・宗教人口・郷土性などを踏まえた複数のヴァリエーションがあり、また一つの教科書会社が形態や内容の異なる複数の教科書シリーズを用意している。なお、ドイツの後期中等教育の国語教科書は、文法や正書法、作文の教育に用いられる言語編教科書と文学的であるが、近年では職業学校を中心に両者を統合した研究本教科書が採択されている。

その一方で、実際の授業で教科書が常に用いられるわけではない。教科書教材に準拠しながら、個々の教師には独自教材（教材テキスト、ワークシート、OHPや電子メディア）を投入する自由裁量が認められており、それを中心に展開される授業も一般的に見られる。

ドイツの教室の生徒数は二五名前後、一授業時間は四五分であり、比較的軽快に授業は進行するが、授業に対する宿題の比重が極めて高く、宿題を準備していなければ授業にはついていけない。また、教室の座席配置も基盤の目状ではなく、教卓に対してコの次であったり、工房・アトリエの

BRD



ごとく独特の幾何模様を織り成したり、一斉授業と学習者間の協同性を重視した。ペア活動やグループ活動とを柔軟に交代できるようにしている。

4 アウトプット型学力の形成と評価

PISA調査結果の不振により、近年のドイツでは、測定・改善可能な学力モデルを実践に配備する傾向にある。その現れの一つとして、表1の「言語演算子」が、国語学習の課題設定の基盤を形成している。課題に取り組んだ成果を出力(表現)する際に求められる基本的言語行為形式とも言うべきもので、情報再現的な「要求領域1」、情報分析的な「要求領域2」、情報解釈・評価的な「要求領域3」から構成されている。これにより、アウトプットとして求められる言語行為が学習者に明示され、例えば、教科書の中では、文学作品を読解する際に次のような学習課題が設定されている。

- ① この物語において登場人物と彼を取り巻く環境はどのように知覚されるか、記述的に説明しなさい。
- ② 登場人物の心的葛藤の推移を○○の理論に基づいて分析しなさい。
- ③ 心的葛藤のエスカレートを回避する行為の可能性について論議しなさい。

BRD



表1: 求められる「言語演算子」

要求領域1
命名する、書き留める／抜き書きする、メモする、記述的に説明する、概略する、欧訳する、呈示する／紹介する
要求領域2
解明する、解説する、特徴づける、位置づける、解明的に説明する、解説する、比較する、整理／分類する、調査／分析する
要求領域3
判断する、評価する、根拠づける、議論・論議する、立場を明らかにする、解釈する、構想する、作成・形成・執筆する

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に八月頃にアップする予定です。

このように演算子の明確化および要求領域の階梯に従った課題設定に応じて、学習者が課題に取り組む、いわば思考・認識のレベルないしは作業技術を獲得させることも、教育言語獲得の中心教科としての国語科の今日的課題であるし、前述のアビトウア試験でも、その能力が問われてきている。



Q 定番の評論教材を扱う上での工夫は？

新学習指導要領が始まりました。評論教材では、「水の東西」を今回も扱うことになっていますが、従来のような、段落分けを行い、語句の意味を追い、噴水と鹿おどしを対比させ……といったオーソドックスなやり方のままでよいのか、考えています。定番的な評論教材を扱う上で、異なったアプローチのしかたはないでしょうか。

青森県・41才男性、他

A

にいみ きみやす
新見 公康

都留文科大学
文学部特任教授

定番教材といっても、生徒にとつては初めての場合が多いはず。文章との出会いを確実な学びにつなげたいものです。関係に気づく・関係を理解する・関係を作るという「学びのスパイラル」の中で、学びの喜びを感じられるような学習方法・指導方法の工夫を探りたいと思います。

「逆読み」の工夫

1 題名の「水の東西」を見て、話題と内容を予想します。このこと必須。「水」に関して東洋と西洋の考え方を述べているのかなどと想像できればよいでしょう。

2 その後、文章の最後の部分に飛び、何がだと言っているのかをつかみます。「鹿おどし」は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだ」の部分を押さえます。命題的表現「AはBである」に類する表現です。この重要さの理解は、容易な

はずです。

3 右2で幹を押さえ、次に枝葉を付けていきます。「どういうことか。どういうものか。なぜか（論理が明確な場合）」という問いを基本とします。「鹿おどし」「水を鑑賞する行為」「極致をあらわす」「仕掛け」について、それぞれ説明を加えます。

説明の分量指定を工夫することで、教科書の「学習」にある内容もカバーできます。

「詳述」という語は、新学習指導要領に一回だけ出現します。「必要に応じて要約や詳述をしたり」とあります。短くまとめたり、長く説明・解説したりなど、今までもよくやられていましたが。「要約」と「詳述」のセットで学習効果を再認識したいところです。「要約」では、何がキーワード、キーセンセンスかの見極めが大切です。

4 これらをもとに、自分の考えの構築・表現に進みます。こちらに充分時間をとれるような展開を心がけたいところです。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。質問は小社「国語教室Q&A係」まで。

大村はまの単純な論理

かりや なつこ
荻谷 夏子

大村はま記念国語教育の会事務局長。主な著書に『評伝大村はま』『教えることの復権』『大村はま 優劣のかたに』などがある。

いつのまにか五十代も後半を迎えた。これまでの人生を振り返って、特筆すべきことを一つ挙げよと言われたら、私は、四十年前も前、大田区の小さな中学校で二年半、大村はまの国語の授業を受けた日々を挙げたい。ぞくぞくするような知の世界の入り口がそこにあり、手を引いてくれる人が目の前にいるという実感。その人の仕事の流儀を驚きつつ、あこがれつつ眺め、まねた。私の言語の核はあそこで育った。

大村はまが優れた国語教師であったことは、多くの人の証言するところだ。しかし、その仕事のどこがどう優れているかということになると、大村の圧倒的な力量に拠る

精神が活発に発動している時にだけ、言語力が育つ、ということ、本当に真正面から受け止めて、それを自分の仕事の基礎にした。著書『教えながら教えられながら』の中で、大村はこう言う。

「子どもの顔が真面目でも笑っていても、そんなことに関係なく、心の活躍している顔と、心の眠っている顔を、さっと読み取らなければならぬと思います。……何らかの手を打つのです。今日は元気がないなあ、などと言わずにです。そんなことを言うともっといやな気持ちになります。そんなことは何も言わないで、手を打つことです。」

ここでは「心の活躍している顔」という言い方をしているが、そういう顔つきの子どもを教室に揃えるために、大村は無我夢中になって、手応えのある、興味深い学習を作り上げていった。いつも目や耳のアンテナを高く掲げ、取材というような気持ちで過ごして、国語学習の種を集め続けた。たいへんな読書家であり、好奇心の塊でもあったから、その網にひっかかる教材は多

部分が大きく、大村の人格そのものに緊密に結びついた面もあって、なかなか客観視されないくらいがある。そもそも、単純にメソッド化することのできない種類の仕事だった。そんなだから、私がいくらむきになって「大村はまはすごい教師だった!」と言ったところで、「うちのお母さんはいいお母さんだ」というセリフと同じように、もっぱら感情的なことばとしか聞こえないに違いない。他人は白けるばかりだろう。優れた教師の優れた仕事を共有することは、どうも本当に難しいことであるようだ。けれども、そこで諦めるわけにはいかない。あの教室の何が特別だったのか、それ

彩だった。その多彩さだけでも、私たち中学生はちよつとぼうつとなつて、心を惹かれた。大村が、そうやって集めた教材を学習の形に構築していくさまは、シャープさと素朴な手作り感が共存し、魅力的だった。手の届かないものと思っていた教養の世界を前にして、こうやれば手が届くのだ、と具体的にやってみせてくれたわけだ。

そんな大村に巻き込まれるかのように、平凡な中学生たちも「心の活躍している顔」をするようになる。機嫌が悪くて、なかなかそういう顔にならないような時は、大村は、もういてもたってもいられないという様子で、さらに工夫をし、誘い、励まし、活気づけた。大村はまがそういう姿勢で教室を営んでいたことの意味は、見かけ以上に大きかったと、元生徒の私は思う。

勉強というものは、もともと学ぶべき価値や必要、正当性のあることを身につけようとしているのだから、それを面白く思おうが、思うまいが、黙ってとにかくやりなさい——と、はつきり言う人は少ないかもしれないけれども、どうもたいていはそう

だけでも伝えたいと思う。

言語というのは、人間の精神活動の中核に深く関わる、これ以上ないほど高次元の活動だ。国語教育は、そういう玄妙な力を育てようというのだから大変な仕事だ。生徒がぼうつとしていたり、ただ従順に受け身の姿勢ですわっていたり、機械的に口や手を動かしたりするくらいで、そうした部分が育つとは、とても考えられない。その人の精神活動が主体的に、活発に機能している時にだけ、じりつとなにか新しい力が付くのだろう。「本気になった脳」が必要なのだ。

大村はまという人は、論理的な人だった。

いうことになっていないのではないか。勉強を面白く思えないお前の方がいけない、という雰囲気すらあるかもしれない。実際は、力の弱い生徒ほど、知的な取り組みを面白く思うことが苦手になっていて、それが悪循環を生みつつけている。心ここにあらず、という顔は、実は学校という場所のあちらにもこちらにもごろごろしているというのが現実だろう。大村はまは、それに毅然とノーを言っているのだ。教師の仕事の一部として、教室に、心の活躍している顔を揃える。そのために職業人としてのすべての工夫も努力もある、というのである。

ことばの力は、一人ひとりにとって一生を通じて大事なものだ。だとしたら、なんとかして、すべての子どもたちに、今より少しでも力をつけてやりたい。勉強が得意とか不得意とかいう次元と違うところで、ことばの力を育ててやりたい。そのためには、「心の活躍している顔」で学ばせたい。そういう授業をするのが、自分の仕事だ——この単純な論理を貫いたという点で、大村はまはすごかった、と、私は思う。

「山月記」の受容史から見えてくるもの

佐野 幹さの みき岩手県立一関第二高等学校教諭、
東京学芸大学大学院連合学校教育
学研究所

はじめに

「山月記」には歴史がある。それは学校や社会で受容されてきた歴史だ。「山月記」は六〇年以上も教科書に掲載され続け、今や、定番教材、国民教材などと呼ばれている。この長い歴史と根強い人気のある「山月記」は、時代ごとに様々な形で人々に受け入れられてきた。私たちは、「山月記」の受容史を追うことで、現在に通じる国語教育の問題を数多く見いだすことができる。

今回紹介するのは、戦後初期に「山月記」が教科書教材化した背景と経済成長期に固着した読みが広がった経緯についてである。

を許される制度ではあったが、それでも教育は民主的な方向へと歩みを進めていたと言える。この制度下で「山月記」は教科書教材となったのである。

しかし、記念すべき第一回の検定審査は極めて厳しいものだった。高等学校国語は申請件数三一件に対して、一件しか合格できなかったのだ。現在からは考えられない結果かもしれない。この合格率の低さを説明するものとして、検定に合格するための正確な基準が定められていなかったことが挙げられる。第一回の審査は「教科用図書検定基準」が定められる前に実施されていたのである。では、検定基準がない中、何を根拠にして教科書を審査したのだろうか。それは、既存の文部省著作教科書や学習指導要領であった。結果、検定教科書には国定教科書（文部省著作教科書）に採用されていた多くの作家、作品が受け継がれることになったのだ。

そして、このことが「山月記」教科書採録に有利に作用したと考えられる。中島の「弟子」が「山月記」に先立って文部省著作教科書『中等国語』に採用されており、検定条件に適合していたからである。さらに幸運なことに、中島作品は当時の学習指導要領の方向性にかなった作品でもあった。

昭和二六年度版学習指導要領では「読むことの教育」は

かつて「山月記」は読み解く教材ではなかった？

教材化の背景については、様々な憶測が飛び交っているが、これまでの研究では、掲載当初の教育思想や文化・社会的背景を考慮して論じられてこなかったように思える。確認しておきたいことは、「山月記」は戦後初期、教育の民主化を模索する中で教材化された、という点である。

戦後民主主義教育を目指した政策の一つに、教科書の検定制度がある。それまでは文部省が作成した教科書を一律に使用していたのだが、一九四九（昭和二四）年から民間が作成した教科書が使用できるようになったのである。自由採択ではなく、文部省の認定を受けた教科書のみが使用

読書指導中心だった。新学習指導要領でも読書生活の充実が一層重要視されることになったが、昭和二六年度版では今以上に読書指導が重要視されていた。この時期は、アメリカ経験主義の影響により、「読むことの教育」は戦前・戦中の読解中心の「読み方」から「読書」という考え方に広くとらえ直され、人格的な成長を目的とした読書指導や何をどう読むかという読書能力の必要性が認められたのである。戦前・戦中に行われた一方的な教え込みではなく、学習者を中心とした活動に焦点が当てられており、民主的な教育を確立すべくなされた転回であった。この読書指導中心の思想が中島作品に光を当てることになったと思われる。というのは、『中島敦全集』は一九四九（昭和二四）年、毎日出版文化賞を受賞していたからである。

毎日出版文化賞は一九四七（昭和二二）年に、毎日新聞社が「文化国家」の建設を目的に設けた賞である。当時、出版界は良書主義による「文化国家」の建設を声高に主張しており、毎日出版文化賞は社会的な優良図書を選定するための最大級の審判として機能していた。この毎日出版文化賞の受賞は、中島作品が良書として読書の模範図書であることを人々に印象づけたことになる。また、良書の意味を帯びた中島作品は、昭和二六年度版学習指導要領の付録「資料としての図書一覧表」にも挙げられている。ちなみにこの

「人間性欠如」が広まった経緯

さて、戦後高等学校を先導した国語教師に、増淵恒吉がいる。増淵は、戦後初期、混沌とした高校国語教育界の中で、単元学習を取り入れ、グループ学習、話し合い活動、課題学習等の先駆的な実践を行い、後の高校国語教育界に大きな影響を与えた。その増淵が、一九五六（昭和三二）年に「山月記」の授業実践報告をしている。

「山月記」の教材史を追ったとき、盛んに論点となるのが「欠けるところ」をめぐる解釈だろう。袁俊が李徴の詩を評価して、「第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか」と感じる場面である。この「微妙な点」を「人間性に欠けるところがあった」とする解釈を示したのも増淵だった。「李徴人間性欠如説」の発端である。しかし、なぜこのような解釈をしたのだろうか。

解釈の内容は、解釈者のものの見方や考え方を反映するだけでなく、歴史的・文化的・社会的背景に大きく左右される。戦後初期、この「人間性」という言葉は、戦前・戦中の全体主義に対決するための平和主義の思想として用いられたキーワードであった。当時の文献を見ると、いたるところで「人間性」の回復が謳われている。戦後、知識人

「資料としての図書一覧表」とは、文部省が、教材に適するものとして選んだ作家・作品の目録である。つまり、中島作品は文部省からも良書の基準として公認されたわけである。読書指導の模範図書として認められた「山月記」は、「何を讀むか」という観点からすると理想的な文学教材だったことになる。実際、掲載当初の教師用指導書に記された指導目標は、内容の読み取りだけでなく、「山月記」を用いて学習者の読書領域を広げることが目指されている。例えば、一九五一（昭和二六）年度使用の三省堂の指導書には、「小説の読み方を学ぶ」「小説の選び方を学ぶ」「読書の習慣を養う」と書かれており、目標が、広く読書指導にまで及んでいるのが分かる。「山月記」は「正しい読書習慣」を確立し、「優良な小説」を選ぶための基準として位置づけられていたのである。

以上のように「山月記」には、民主主義教育を模索する中で読書指導の一環として検定教科書に採用されたという経緯がある。現在、私たちは読解教材として「山月記」を自明に扱っているが、読書指導という観点で「山月記」を見直してもよい。来年度から実施される「現代文A・B」では、読書活動の充実が図られている。教材化の歴史を踏まえ、「山月記」をどう扱うのが今後、注目される。

私たちは、抑圧されてきた「人間性」を取り戻そうと主張していたのである。しかし、注意すべきは、増淵の言う「人間性」には外部からの圧力に抗するような意味は含まれておらず、李徴の生き方を批判する言葉として使われているということだ。一九五〇年代後半になると、「人間性」に含まれる意味は変化するのである。増淵が「欠けるところ」の解答として用意したのは、「人間性の欠如」一つだけではなく、「深い精神の持ち方が欠けていた」「現実の生活と深いかかわりあいを持って、人生を生き抜く誠実さに欠けるところがあった」の三つであった。これらの要素は、マックス・ウェーバーの言う、資本主義のエートスに当てはまる。言い換えると、増淵が李徴に欠けているとしたのは、世俗内で禁欲的な「生活態度」の「精神」を持たない「人間性」だったのである。

当時、日本は安定した資本主義社会になろうとしていた。五五年体制が成立し、一九六〇（昭和三五）年には池田内閣が所得倍増計画を発表する。「人間性の欠如」という解釈は、資本主義社会を支える自己規律能力のある人間の育成が求められた時代に広く受け入れられた解釈だったのである。経済成長下において、「学校で一生懸命勉強し、まじめに働けば豊かになる」という「大きな物語」を人々は信じて疑わなかった。したがって、その物語に反し、刻苦

を厭い、切磋琢磨に努めず、現実生活を顧みなかったとされた李徴は自己規律能力がない人間としてスケープゴートの役割を負わされたのである。また、この時代は能力主義による、「文章を正確に読む力」が求められる、読解技術が信奉された時代である。これと相まって、「欠けるところ」や「虎になった原因」を李徴の性格から読み取り、「人間性の欠如」といった解答に導いていく作業が盛んに行われるようになったのである。

現在、私たちの教室で、李徴の生き方を反省材料にする読みの授業がなされているとすれば、その反省内容が奉仕するのはどのようなイデオロギーなのだろうか。自覚的でありたい。

おわりに

「山月記」が国民教材としての地位を確立していく過程を見ることで、私たちが現在抱えている問題が次々に明らかになる。今回紹介した以外にも、プレテクストの扱い方と学習者の主体性、確実性を志向する教師の心性と教科カリキュラム、日本語ブームとナショナリズムとの関わりなど、多くの今日的問題がある。「山月記」の歴史を知ることとは、近代学校教育制度を教材という具体的な視点から問い直すことに繋がっている。

兼好・長明、パスカル・ソロー

たぐち かずお
田口和夫

文政大学名誉教授

昭和二十九年、大学に入った時、担任になられた馬淵和夫先生が「今のうちに世界文学の名作を読んでおきなさい。卒業論文を手がけるころには、それどころではなくなるから」と教えられた。なるほどそんなものかと田舎者の新入生は納得して、図書館からあれこれと借り出しては読みあさっていた。その中にパスカルの『パンセ』もあった。「人間は考える葦である」と聞き知っていた断章は次のようなものだった。

人間はひとくきの葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、

たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない。

だから、われわれの尊厳のすべては、考えることになかにある。われわれはそこから立ち上がらなければならぬのであって、われわれが満たすことのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。

この断章三四七は分かりやすいが説明しすぎていて、ちよつと拍子抜けしたような覚えがある。「人間は考える葦である」だけの方が、よほどいろいろと考えられる。『パ

ンセ』の神学的な長文にはまったく関心が持てなかったが、断章らしい断章、短文の警句はいろいろと考える余地があつて面白かつた。例えば、「反対。人間は、生来、信じやすく、疑いぶかく、臆病で、向こう見ずである」(一二五)とか、「彼は川の向こうに住んでいる」(二九二)、「正義。流行が好みを作るように、また正義をも作る」(三〇九)などの短文がそれである。

初めて『徒然草』を読み通したのは、同じ昭和二十九年、一年のときの国文学演習で小西甚一先生が教材とされたためだった。小西先生のご指導は厳しく、研究的に読むことの基礎をたたき込まれた。仏教語の意味について、古語辞典の解釈しか示せなかつたとき、「君にはまだ分からんだろう」と言われて、滔々と講じられたことを、今のよう思い出す。それもあつて、結局私は仏教説話集を卒業論文として取り上げることになるのだが、閑話休題。読み進めていくと、『徒然草』にも『パンセ』に負けない断章があることに気付いた。高校で教わることも無かつた、兼好のつぶやきというべき章段である。

後の世の事、心に忘れず、佛の道うとからぬ、こころにくし。(第四段)

あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。(第二百二十七段)

神仏にも、人のまうでぬ日、夜まゐりたる、よし。(第九十二段)

よき細工は少しにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたくたたず。(第二百二十九段)

などは、殊に短いものである。近年、大修館の古典教科書に「断章三編」と名付けて、百二十七段を含めて短章を採用したのは、『パンセ』を読むひそみに倣つて、読み手が自由に考えを展開してほしいと願つたからである。

ヘンリー・ソローの『ウォールデン 森の生活』は、今では環境保護という関心から読まれることが多いらしい。学生とき、これを読んで、ソローが森の中の小さな一軒家に一人住んで、観察し、考える生活を送っている、ということからまず連想したのは、長明の『方丈記』だった。今読み返してみると、違いばかりが目立つのだが、学生ときは、類似点が気になったのである。

『方丈記』の成立は建暦二年(一一二二)、源平合戦という内乱を経て、武士の世が確立してくるときである。ただし『方丈記』には源平合戦は描かれず、時期の重なる五大災厄、安元の大火、治承の辻風と遷都、養和の飢饉、元暦

の大地震が描かれる。『ウォールデン 森の生活』は一八四五年から一八四七年までの森の生活をまとめ、一八五四年に出版されている。アメリカ最大の内乱と言わなければならない。ソロー没年の前年一八六一年から始まっている。

時代は違っても、国を揺るがす内乱前夜に生きた知識人の生き方という点でも、なにかの共通性があるようにも思った。この二書を較べてみることによって、『方丈記』の特色がより鮮明になるのではないか、そう思えたが、結局やらす仕舞いだった。今しばらくその作業を試みよう。

1 小家の大きさ

長明 広さ一丈(303m) 四方。約四畳半。

高さ七尺(2122m)

ソロー 広さ10×15 f(304×457m)、

高さ8 f(243m)

ソローの方には外側に暖炉が付き、長明の方は東に三尺のひさしが付く。ソローの方が大きいけれども、小さい家という点では共通する。

2 小家の構造

長明 組み立て式、移動可能。

ソロー 固定式、地下貯蔵庫・屋根裏部屋付き、移動不可能。

ここで二つの違いが明らかになる。ソローが自分の手で作った小家は、冬の備えもある堅固な建物で、『ウォールデン 森の生活』には、建築に要した費用詳細も記録されている。

下賀茂の河合社に復元された方丈庵に入ってみると、床の真ん中にいろりが切つてある。なるほどとは思ったが、これは『方丈記』の記述には無いことである。わずかに「埋み火をかきおこして、老の寢覚めの友とす」と述べているので、冬の生活が推察されるのだが、それはいろりではなく、火桶の可能性が高いだろう。復元に当たっているとしたのは、京都郊外の冬の寒さを考えての当然の判断とは思われる。

3 小家での生活

二人とも小家に於いて自炊生活を送っていたが、ソローは畑を耕し、トモロコシや豆を育て、自分でパンを作っていた。長明は「岩梨・零余子・芹」を取り、「野辺のお

はぎ・峰の木の実」で命を継ぐと、山野での採集生活を言うが、具体性に欠ける。「なすべき事あれば、すなはちおのが身をつかふ」と言っているので、使用人はいなかったと言えようが、これに限らず、長明の記述には生活感が乏しい。長明が範とした慶保胤の『池亭記』では、食事などの雑事は一切言及していないので、それでも『方丈記』はある方だとは言えようが、ソローに較べれば、生活者としての長明の姿はぼんやりとしか読み取れない。

長明が隠遁のことなど考えもせず、歌人としての希望に満ちていた時代の作らしい和歌が『鴨長明集』(新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』)に収められている。

かりに来てみるだにたへぬ山里に
たれつれづれと明け後のくらすらん

隠遁生活に入った後の『方丈記』には、その山里の生活が、どのように「つれづれ」ではなかったのかという発見が記されているのだが、それでも長明は、生活雑事を記録しようとは思わなかったのである。

4 ついの住処

ソローは二年二ヶ月をもってウォールデン湖畔の小家生活を終わらせ、約七年後に推敲を重ねた『ウォールデン

森の生活』を出版している。ソローにとってウォールデン湖畔の小家生活は、思索や著述のために必要ではあったのだろうが、主としては、一つの実験としての意味があったのだらうと考える。当然のことながら、ソローは俗世を捨てた隠者ではなかった。だから彼は小家生活の中で文明批判をし、精神遅滞の貧者にも学び、逃亡奴隷にも手を貸していたのであろう。

長明はどうだろうか。仮の住処と考えていた小家に五年の歳月を重ね、その中で『方丈記』を執筆している。推測されるところでは、この小家は長明のついの住処となつたらしい。新大系の解説で、佐竹昭広氏は、「老いたる蚕の繭をいとむ」という語が、仏典の「蚕が繭を作りその中で死ぬ」という比喻に基づいている事を指摘し、「新しく結んだ方丈の中で死を迎える決心がここに表明されて」おり、「五年前を振り返りながら、あえて老蚕の比喻を借用した長明に、転居の意志はもはやなかったと読んでいい」と述べられている。堅固な家が仮の住処であり、仮の家がついの住処である、というのはパスカルの「反対」の論理に似る。『ウォールデン 森の生活』を読みあわせることによって、『方丈記』はよりよく読めるのだと言いたい。

『パンセ』世界の名著24 『パスカル』中央公論社、昭和四一
『ウォールデン 森の生活』今泉吉晴訳 小学館、平成一六

英語ができた

ネットで検索すると、「英語がほしい」という言葉がヒットしますが、どこか変です。「仕事ができた」「逆立ちができた」「友達ができた」「彼女がほしい」などの例もあります。最後の例など、
・高校生の彼女がほしいなら、まずその性格捨てたら？

という例文を見ると、「できないなら」の見誤りかと疑われます。老眼のせいかと思つて、目をこすつて見直しても、「できない」です。「彼女がほしい」「英語ができない」なら何の問題もありません。しかし、「彼女がほしい」「英語がほしい」の類の言い方が増えているようです。

ネットの例を注意して見ると、
・私は上手な日本語を話すことがほしい。
・日本人の友達がほしい。
など、日本語学習者や外国人だと思われる人の使用している例が多いようですが、そうだけでも言えません。明確に日本人が使っている例もあります。

さて、「たい」は、そうすること、そうであることを希望する意味を表す助動詞です。話し手の希望だけではありません。

・私は上手な日本語が話したい。
・私はずっとここにいたい。

などは、話し手自身（私）の希望ですが、
・あなたは上手な日本語が話したいのですね。

・おもしろい本が読みたい人は、
などのように、聞き手（あなた）や第三者（人）の希望も表します。

ここで重要なのは、話し手であれ、聞き手、第三者であれ、「たい」は、意図的にそうする、そうである行為に付くということです。人間だけでなく、動物や植物の意図的な行為でも構いません。

・その犬は肉が食べたかった。
・日の光を浴びたい向日葵は、
希望は意図的なものですから、「たい」が意図的な

行為を表す動詞にしか付かないのは当然です。

「できる」について考えてみますと、これは意図的な行為ではありません。「英語ができる」は、

・私は英語ができる。
のように「私は」を入れることができますが、この「できる」は、「私」が意図的にそうしようとして「できる」ではありません。前掲の、

・私はおもしろい本が読みたい。
では、「読む」は「私」の意図的な行為で、「読みたい」と希望するのは「私」ですが、「できる」のは「私」ではなく「英語」です。「英語」が希望するということはありませんから、「英語がほしい」という言い方は本来しないのです。

「できる」の他にも、
・山が見える。
・音が聞こえる。

などの「見える」「聞こえる」には「たい」が付きません。これらも、意図的な行為を表す動詞ではなく、

・私は山が見える。

・私は音が聞こえる。

と「私は」を入れてみても、「私」が意図的にそうしようとして「見える」わけでも「聞こえる」わけでもありません。さらに言えば、これら限られた動詞だけでなく、

・私は難しい本が読まれる（読める）。
・この幼児はかたい食物が噛まれる（噛める）。

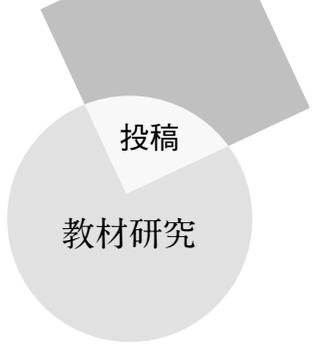
など一般の動詞に可能の助動詞「れる」が付いたものや五段動詞を下一段化した可能動詞にも「たい」は付くことができます。「見える」「聞こえる」も語源的には「見る」「聞く」に可能の助動詞「ゆ」「らゆ」が付いたもので、本来は可能表現なのです。

「英語がほしい」のような変な言い方が広がっていくとは思いませんが、本来の正しい言い方で、
・英語ができるようになりたい。

と言うべきでしょう。「なる」はこの場合、意図的な行為を表す動詞です。

北原 保雄

新潟産業大学学長 「明鏡国語辞典」編者



髪は人

『源氏物語』の「髪」の描写より

ますかわ あつし
益川 敦

頌栄女子学院国語科

はじめに

古典初学者である中学三年生の授業で、『源氏物語』の〈若紫〉を教材にした。

ただこの西面にしても、持仏すゑたてまつりて行ふ、尼なりけり。簾すこし上げて、花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに読みたる尼君、ただ人と見えぬ。四十余ばかりにて、いと白うあてに、瘦せたれど、頬つきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長さよりもよなう今めかしきものかな、とあはれに見たまふ。(以後 小学館『日本古典文学全

集』を底本とする。)

『尼君』についての描写である。助動詞の「る・らる」を学習した直後で、「そがれたる」の「れ」を素通りするわけにもいかず、この「れ」が自発・可能でないことは明らかである。文脈から受身と解釈したいところだが、それでは「髪」が主語になつてしまう。なので、普通ならば尊敬と結論づけるところだが、この箇所では「中の柱に寄りゐて」「いとなやましげに読みたる」などとなるように、『尼君』を敬意の対象として描いていない。例外(人を主語としていない受身の用法)ではあるが、この「れ」は受身と解釈せざるを得ない。

と、説明をした。そしてすぐに思い出したのが、受身の「る・らる」の例外の説明にしばしば使う『枕草子』(にくきもの)の「硯に髪の入りてすられたる」の例である。どちらも髪——「髪」を主語とした受身の用法は本当に例外なのだろうか? 『源氏物語』に出てくる「髪」「御髪」「髪ざし」「額髪」など、人間の頭髪を表す語、133例について精査してみたことにした。

結論

133例のうち、「る・らる」とともに用いられているのは、前出の〈若紫〉の用例を含めて13例に過ぎない。そのうち2例は、『東屋』で『薫』の姿を見た女房たちの様子を

描写した「すずろに、見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくりはれて、」のように明らかな自発である。『全集』の頭注に従うなら、『若紫』の「なよよかなる御衣に、髪はつやつやとかかりて、末のふさやかに探りつけられたる、」も自発ということになる。他の9例は恐らく受身であると思われる。

白き御衣に、髪は梳ることもしたまはほど経ぬれど、迷ふ筋なくうちやられて、

↑(総角)大君の髪

いと暑さのたへがたき日なれば、こちたき御髪の、苦しう思さるるにやあらむ、すこしこなたになびかして引かれたるほど、たとへんものなし。

↑(蜻蛉)女二の宮の髪

などであるが、そのうちの8例は、敬意の対象として描かれている人物の髪について使われているため、尊敬の用法とも解釈することができる。残りの1例も、

「見だに向きたまへかし」と、心やましようつらうて、引き寄せたまへるに、御衣をすべしおきて、ぬざり退きたまふに、心にもあらず、御髪の取り添へ

られたりければ、いと心うく、宿世のほど思し知られて、いみじと思したり。↑(賢木)藤壺の髪

以上の結果だけをもとに本稿を結論づけることは無論不可能である。しかしながら、133の用例を見ると、人間の頭髪が、人そのものを表していると思われる例が随所にある。やはり、髪は人であるに違いない。実状を以下に詳説する。

i 髪は女

『源氏物語』における女性描写に、髪が不可欠であることに異論はないと思われる。不可欠というよりも、髪が女性そのものを表しているといつてもよさそうである。

《宿木》にある《六の君》の描写、

大ききよきほどなる人の、様体いときよげにて、髪の下り端頭つきなどぞ、ものよりことにあなめでたと見えたまひける。色あひあまりなるまでにほひて、ものものしく気高き顔の、まみいと恥づかしげにらうらうじく、すべ

て何ごとも足らひて、

は、身長・スタイル・髪・頭つき・肌……、女性描写のフルコースと言えよう。他にも、

いと白うをかしげにつぶつぶと肥えて、そぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ、口つきいと愛敬つき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたる所なく、をかしげなる人と見えたり。↑(空蟬)軒端萩の描写

↑(常夏)雲居雁の描写

など、女性を多角的に描写している例は多い。女性の美だけを描写するわけではない。もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、瘦せ瘦せに御髪少なるなどが、かくそしらはしきなりけり。↑(少女)花散里の描写

右の例は、女性に対するマイナスの評価を

やはり多角的に描写している例である。病人を描写した例でも、

御髪はいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたるきはの、つやつやとめでたうをかしげなるも、

↑〈総角〉大君の描写

やはり髪は不可欠である。更に、〈東屋〉で「いとめでたし」と評価される《常陸介の実の娘》の例を見ると、むすめを、昼より乳母と二人、撫でつくろひ立てたれば、にくげにもあらず、十五六のほどにて、いと小さやかにふくらかなる人の、髪うつくしげにて小桂のほどなり。裾いとふさやかなり。

「いとめでたし」の判断材料に占める髪の場合の大きさが明らかであろう。

風の吹きあげたりつる隙より、髪いと長く、をかしげなる人こそ見えつれ。

↑〈手習〉浮舟の描写

几帳の帷子の綻びより、御髪をかき出だしたまへるが、いとあたらしくをかしげなるになむ、しばし鉄をもてやすらひける。↑〈手習〉浮舟の描写

いとさかりにきよなる御髪をそぎ棄てて、忌むこと受けたまふ作法悲しう口惜しければ、

↑〈柏木〉女三の宮の髪

などなど、枚挙にいとまがない。朝日さし出でたるけはひ漏り来たるに、埋もれたる御衣ひきやり、いとうたて乱れたる御髪かきやりなどして、ほの見たてまつりたまふ。

↑〈夕霧〉落葉の宮の髪

右の例では、髪が男女の情交を表している。いとささやかなる人の、常の御悩みに瘦せおとろへ、ひはづにて、髪いとけうらにて長かりけるが、分けたるやうに落ち細りて、梳ることもをさをさしたまはず、涙にまろがれたるは、いとあはれなり。

↑〈真木柱〉鬚黒北の方の髪

右は、髪が病状を表した例である。〈葵〉では、《全集》の頭注にある通り、平素は親しめない美しさを持つ《葵の上》が物の怪にとりつかれ、床についている様子を、白き御衣に、色あひいと華やかにて、御髪のいと長うちたきをひき結ひ

右の例に描かれているのは、完全に髪だけである。〈椎本〉の例を見てみる。

いとそびやかに様体をかしげなる人の、髪、袿にすこし足らぬほどならむと見えて、未まで塵のまよひなく、艶々とこちたううつくしげなり。

↑〈中の君〉

髪さはらかなるほどに、落ちたるなるべし、末すこし細りて、色なりとかいふめる、翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり。↑〈大君〉二人の女性の対比が、髪だけを材料になされている。

髪の手をかしげさなどは、こまごまとあてなり、宮の御髪のいみじくめでたきにも劣るまじかりけり、と見たまふ。↑〈東屋〉浮舟の描写

これも、髪だけを材料に二人の女性を対比的に描いている例である。やはり、髪が女性そのものを表していると考えられる。

例外はある。言わずもがな《末摘花》である。「まづ、居丈の高く」から始まって、さんざんに描写される《末摘花》であるが、頭つき、髪のかかりはしも、うつくし

てうち添へたるも、

と描写して「かうてこそらうたげになまめきたる」と結んでいる。〈明石〉では、《紫の上》の心労を、

いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、ところせかりし御髪のすこしへがれたるしもいみじうめでたきを、と描いている。〈柏木〉の、

また、いとあたらしう、あはれに、かばかり遠き御髪の生ひ先を、しかやつさんことも心苦しければ、

↑女三の宮の髪

では、髪が人生そのものの比喩として用いられている。

iii 髪 の 力

《夕顔》では、《夕顔》の遺体に対する源氏の姿が描かれている。

したたかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目くれまどひて、あさましう悲しと思せば、

とある通り、源氏の動転の原因は髪である。〈手習〉で、

げにめでたしと思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう、袿の裾にたまりて、ひかれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ。↑〈末摘花〉

髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、↑〈末摘花〉

いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などを、いとほしと思せば、まほにも向ひたまはず。

↑〈初音〉

と描かれている。〈蜻蛉〉で、《女一の宮》と比べて「なはさままなるにや、似るべくもあらず。」と言われる《女二の宮》の描写に「御髪の多さ、裾などは劣りたまはねど、」とあるのも、この例外の中に入れるべきであろう。

髪だけ美しければそれでいい、というわけにもいかない場合があったようだ。

ii 髪は暮らし

髪がその人の生活を表している例も多し。最も顕著なのは出家である。

いま一人は、「あな用な。よからぬ物ならむ」と言ひて、さやうの物退くべき印を作りつつ、さすがになほまもる。

というように、得体の知れないもの（実は失踪した《浮舟》）に怯えた僧に対し、「もの怖ぢせぬ法師」が、「憚りもなく、奥なきさまにて近く寄りてそのさまを見れば」、その後さままな議論がかわされ、最終的に「まことの人のかたちなり」と決着するのだが、まず描かれるのは「髪は長く艶々として」、やはり髪なのである。

髪は人である。〈御法〉で《紫の上》を

御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまを限りなき。

と描写している箇所『全集』頭注に「（髪）の毛が擬人的に描かれる」とあるが、擬人ではない。髪は人そのものなのだ。受身の【る・らる】の例外、すなわち、人が主語になっていない受身の例として、髪を主語とした文章を挙げることは、一考を要するのではないだろうか。

山内祥史 著 太宰治の年譜



A5判・上製・三五六頁
定価二九四〇円（本体二八〇〇円）

評者II 東郷克美
早稲田大学名誉教授

近代作家の年譜を一巻にしたものとして、本書は荒正人『漱石研究年表』と並ぶ力作だ。山内氏は昭和三十年代から手作りの個人研究誌「太宰治研究」を発行、太宰作品の成立史や評論史の研究を持続して来た第一人者である。その成果は個人編集による筑摩版第十次『太宰治全集』として刊行された。それは「作品の脱稿年月日は推定を含めすべて記載」（本書「凡例」）し、「脱稿」順に配列した画期的な全集だった。発表年月ではなく、「脱稿」年月日を確認するの

は至難のわざである。そのためには、作品の発表書誌のみではなく、その執筆・脱稿状況をめぐらるあらゆる情報を可能なかぎり精査しなければならぬ。典拠となる文献の博覧はもとより、周辺の関係者からの聞き取りなども必須の前提だ。そのため驚嘆すべき調査研究の精髄が本書に集約されている。太宰の読者・研究者にとって必携の書であることはいまでもないが、一冊を通読するだけでも、この鬼才の生涯の細部が鮮やかに浮かびあがるだろう。

三森ゆりか 著 大学生・社会人のための 言語技術トレーニング



A5判・並製・二六四頁
定価二二〇〇円（本体二〇〇円）

評者II 板盛美弥

本書の帯には「グローバル社会で求められるのは世界基準のコミュニケーション」という刺激的なコピーが躍っている。ユニークなアプローチで言語教育の実践を重ねてきた著者の最新作は、大学生・社会人を主対象とした日本語トレーニング教本である。まず、社会で求められる言語力を身につけるためには「言語技術」を学ぶ必要があることが説かれる。そして「対話」「要約」から「クリティカル・リディング」「小論文」まで、さまざま

な言語技術が豊富な例と課題を通じて学べるようになっていく。本書の課題は具体的かつ実践的で、例えば「対話」の章では、何でも「ビミョー」で済ませる曖昧な返答を排すための練習として「問答ゲーム」が提示されている。5W1Hを意識しながら質問を積みかけるこの練習は、対話だけでなく、論理的な文章の組み立てにもつながる。このように高校生でも十分取り組める本書の内容は、「国語表現」の授業や小論文指導にも大いに参考になるだろう。

蒲谷宏著 待遇コミュニケーション論



A5判・並製・三五二頁
定価二九四〇円（本体二八〇〇円）

評者II 細川益男

「待遇」と聞くと、何やら眉間に皺のよりそうな話かと腰が引けてしまうが、大胆に約めて解釈すれば、（主に会話を通しての）人と人とのやり取り、ということになるようである。「人と人」と「やり取り」をするのであるから、それは「コミュニケーション」ということになる。ふだん、他人（相手）と言葉のやり取りをするときに、どのようなことを意識しているのか、そこにはどのような規則があるのかを探った書ということになる。

言葉のやり取りをするときには、相手が自分にとってどのような立場か——目上か目下か、間柄は近いか遠いか——、またどんな場合か——立ち話なのか会議の席なのか——などで変わってくる。そこでは当然敬語の使い方なども重要な要素となってくる。当事者や場所を設定しての、具体的な事例の検討も多く、理解を助けてくれる。書面からは、この表現は絶対ダメ！といった姿勢は感じられず、柔らかな雰囲気の本となっている。

『編集代表』尾崎雄二郎・笹沙雅章・戸川芳郎 中国文化史大事典



B5判・上製・函入・一五〇六頁
定価三三六〇〇円（本体三〇〇〇円）

評者II 向嶋成美
筑波大学名誉教授

悠久の歴史と広大な国土を有する中国には、これまで多くの文化遺産が蓄積されている。それらを集大成した事典がこのたび出版された。中国語学の尾崎雄二郎氏、中国史学の笹沙雅章氏、中国思想の戸川芳郎氏の三氏を編集代表とするこの事典は、「中国文化史大事典」の名に相応しく、哲学、文学、言語、歴史、地理、民族、宗教、美術、芸能、音楽等、中国文化の広範な世界を網羅している、七千条余にも及ぶ項目が立てられている。

例えば「杜甫」は川合康三氏の執筆であるが、杜甫の出自、略歴から、その作品の文学史的な位置づけが示され、「個人の肉声を普遍的な文学にまで昇華した」と見事な解説ぶりである。また「文化史」の一環として取り上げられている「茅台酒」は、佐治俊彦氏の執筆であるが、この酒の製法や特徴などが説明されているのに続けて、「国酒」としての紹介もなされていて、面白く読める。中国の文化を学ぶための優れた工具書の誕生を歓迎したい。

新課程用

「現代文B」「古典B」

分冊・精選・新編3シリーズ刊行!



古典 古文編 [現B300]



古典 漢文編 [現B311]



現代文 上巻 [現B308]



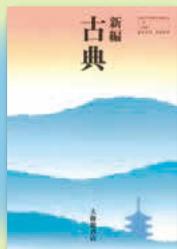
現代文 下巻 [現B309]



精選 古典 [現B312]



精選 現代文 [現B310]



新編 古典 [現B301]



新編 現代文 [現B311]

※平成27年度用として「現代文A」・「古典A」を検定申請中です。

確かな論理の力をはぐくむ、

2タイプの入試対応型教科書

『現代文 上巻・下巻』『精選現代文』の評論ラインナップ

筆者名	教材名	現代文 上巻 (現 B308)	現代文 下巻 (現 B309)	精選現代文 (現 B310)
茂木 健一郎	可能無限	●		●
清岡 卓行	ミロのヴィーナス	●		●
長谷川 一	システムとしてのセルフサービス	●		●
岩井 克人	ホンモノのおカネの作り方	●		●
山極 寿一	分かち合う社会	●		●
中村 桂子	虫愛つる姫君	●		●
西垣 通	生命情報・社会情報・機械情報	●		●
高階 秀爾	居住空間における日本的なもの	●		●
鈴木 孝夫	人を指す言葉——自称詞・対称詞・他称詞	●		●
橋本 治	敬語への自覚、他者への自覚	●		●
養老 孟司	自然に学ぶ	●		●
丸山 真男	「である」と「する」こと	●		●
内田 樹	「贈り物」としてのノブレス・オブリージュ		●	●
山崎 正和	文明と文化の教育		●	●
鷺谷 いづみ	生物多様性の恩恵		●	●
伏木 亨	からだで味わう動物と情報を味わう人間		●	●
野矢 茂樹	猫は後悔するか		●	●
江下 雅之	ネットワーク上のコミュニケーション		●	●
中村 良夫	風景はどのように立ち現れるか		●	●
樋口 覚	地図の言語と東西南北		●	●
鷺田 清一	ここは見える？		●	●
尼ヶ崎 彬	姿——日本のレトリック		●	●
加藤 周一	日本文化の三つの時間		●	●
小林 秀雄	無常ということ		●	●
山田 昌弘	家族化するベトナム		●	●
村上 陽一郎	科学の現在を問う		●	●
青木 保	世界は、いま——「多文化世界」の構築		●	●
山崎 正和	心に「海」を持って		●	●
権木 野衣	「あらわれ」と「消え去り」——日本のアート		●	●
野村 雅一	自己演技と表情		●	●
竹内 啓	地球システムの中の人間		●	●
北村 透谷	漫罵		●	●

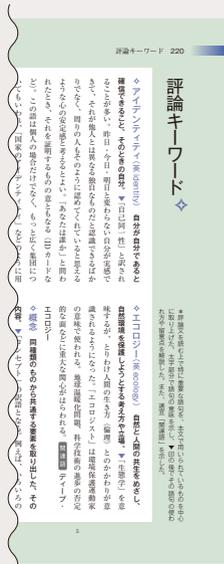
茂木健一郎、鷺田清一、内田樹、山崎正和、養老孟司などなど…。
入試定番の著者の文章を完全網羅。

入試頻出著者については、
本誌の33ページ参照。

共通 「評論キーワード」 言葉の本質的な理解を促す

評論文中に出てくる言葉で特に重要な語句をピックアップし解説するコーナーを設けました。辞書的な語義の解説だけでなく、より深く理解し応用力を身につけられるよう発展的な解説も盛り込んでいます。

評論キーワード



特色

1 分冊と完全ジャンル別による圧倒的な教材数

二、三年生で各一冊の分冊タイプとし、さらに完全ジャンル別の配列とすることで、教材数を大幅に増やしました。さまざまな現場の実情に応じて、教材を自由に選び、組み合わせることができ



特色

1 一冊本でも万全のボリューム、重厚な著者陣

評論を重視し、茂木健一郎、内田樹を筆頭に、入試頻出の著者陣による質の高い評論をあわせて20本収録。入試を意識し、主要なテーマを網羅しました。



2 論理的思考力の育成に配慮した入試頻出の著者陣

評論を重視し、上巻の茂木健一郎、下巻の内田樹を筆頭に、入試頻出の著者陣による質の高い評論を上・下巻あわせて24本収録。

2 高校生の感性に訴える近現代の名作を精選

小説は、「山月記」「ころろ」「舞姫」といった定番教材に加え、太宰治、井伏鱒二、安部公房、三島由紀夫と、近現代の名作を収録。小川洋子の作品「巨人の接待」も収録し、高校生の多様な感性に訴えるよう配慮しました。

実社会で生きる国語の力をはぐくむ



特色

1 新鮮で親しみやすい教材を テーマ別単元で構成

言葉、伝統、社会、ユーモア……。これからの時代を切り開いていく高校生のために、自分で課題を見つけ考えていくきっかけとなる教材を精選しました。

2 本の魅力を伝え、読書の世界を広げる 「読書の窓」「読書の広場」。

単元末に適宜「読書の窓」のコーナーを設け、テーマごとに高校生にすすめたいさまざまな本を紹介しています。また、巻末の「読書の広場」には魅力的な作品を二編収録し、生徒がすすんで読書の世界を広げられるよう配慮しました。

3 カラー写真、 イラスト多数収録

全編にわたって、美しい写真や魅力的なイラストなどをカラーで効果的に収録し、生徒の学習意欲を高めるようレイアウトにもさまざまな工夫をしています。



特色

1 時代とジャンルを網羅した、 充実の教材数

古文編、漢文編の分冊タイプとすることで、教材数を大幅に増やしました。さまざまな現場の実情に応じて、教材を自由に選び、組み合わせることができます。

2 教材に即して要点を確認できる、 文法の設問

古文編では、ほぼすべての教材に「文法」の設問を設け、総合的な文法力が身につく識別の問題を中心に、確認しておきたいポイントを網羅しました。

3 教材に即して要点を確認できる、 句法のまとめ

漢文編では、各教材ごとに「訓読で注意する文字」と「句法」をまとめ、重要なポイントを整理できるようにしました。さらに頻出の八つの句形について用例付きで丁寧に解説したコラム「基本句形のまとめ」を掲載し、要点を随時参照できるようにしました。



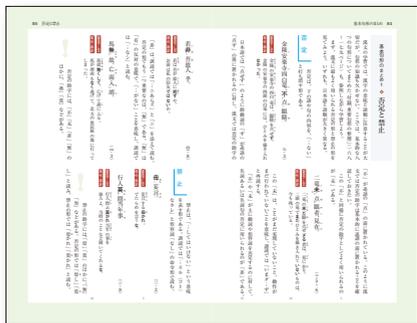
読書の窓 読書の広場



単元末に適宜「読書の窓」を設けて本を紹介。また、巻末の「読書の広場」には魅力的な読み物として「星の王子さま」「鉄道員」を収録して、生徒がすすんで読書の世界を広げられるようにしました。



古文編・漢文編とも、本文理解に必要な地図・系図などの資料のほか、絵巻・さし絵などもカラーで効果的に収録しています。



4 新しい発想でまとめた、役立つ巻頭図録

巻頭には古典の学習に有益な図録を11ページにわたり掲載。模型や写真を効果的に使い、ビジュアル世代の高校生が古典の世界を豊かにイメージできるよう工夫しました。

5 古典の理解がより深まる「古典の窓」

単元末に適宜書き下ろしコラム「古典の窓」を設け、作品・作者の魅力や文学史についての理解がより深められるようにしました。

付属資料のご案内

※付属資料セットの構成は教科書ごとに異なります。
詳細は各教科書のパンフレット等をご参照ください。

指導資料セット

1 指導資料

教材研究に必要な情報をもれなく収録。発問例も充実。

2 授業展開指導ノート

授業の進め方が一目でわかる実践的な指導案例集。
板書例やエピソードも豊富に収録。

3 補助資料集

参考分野や補助教材を使いやすい体裁でまとめた資料集。

4 問題集

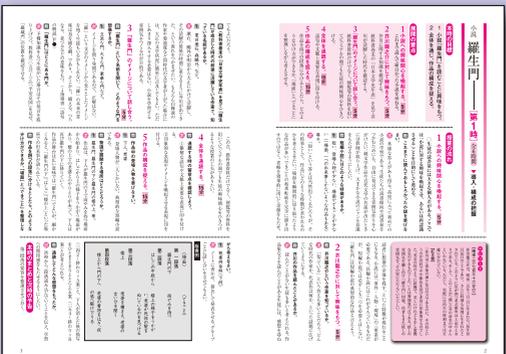
総合・選択式・基本の三種類をご用意。

5 論理トレーニング指導ノート

評論教材読解のポイントを明解に解説。

6 付属資料CD-ROM

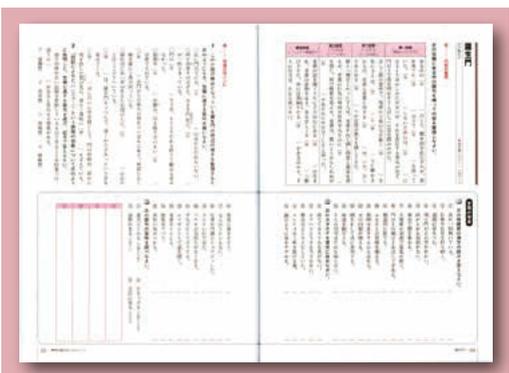
豊富なデータを使いやすい形式で収録（教科書原文・問題集・発問出題例・補助資料集・古文品詞分解など）。漢文編集ソフト「大修館漢文エディタデータプラス」もセット。



その他

1 学習課題ノート(生徒用)

学習のポイントが確認できる書き込み式問題集。



2 朗読CD

主要教材を一流の朗読で収録。

3 指導資料CD-ROM

指導資料をPDFファイルで収録。一枚でいつでもどこでも教材研究が可能です。